

甲南英文学

No. 21  2006

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

井野瀬 久美恵 *大森義彦 高橋勝忠 中谷健太郎 篁 雅明 横山三鶴

目次

| | | |
|---|--------|----|
| <i>Eloisa and Abelard</i> における sympathy…………… | 山口 徳一 | 1 |
| 消印は Jefferson— <i>Light in August</i> における郵便…………… | 沖野 泰子 | 15 |
| 二人のトランセンデンタル・ヒロイン | | |
| ——ヘスター・プリンとマーガレット・フラ——…………… | 水本 有紀 | 31 |
| 再投射分析ふたたび | | |
| —— <i>either-or</i> 構文のロバ文を巡って——…………… | 根之木 朋貴 | 53 |



Eloisa and Abelard における sympathy

山口 徳一

SYNOPSIS

Pope, inspired by Eloisa's dilemma as to whether to follow her love-passionate instinct or live a virtuous life in a religiously strict convent, tries to describe her conflict just as it is, in the style of verse.

But this poem has not been highly regarded from the religious viewpoint. It is probably because Eloisa would settle her conflict by committing suicide, which does not meet the principles of the Catholic Church at all.

Such a religious criticism, however, seems to tell us something about the poet's attitude. In other words, the criticism against him results from his being critical of Catholicism. The only consolation Eloisa could find in her confinement is the sympathy to be felt though the poet himself as well as correspondence with her lover, while it is the kind of sympathy Catholicism could not allow itself to have for the person who will commit suicide.

序

It was many years after this separation, that a letter of Abelard's to a Friend which contain'd the history of his misfortune, fell into the hands of Eloisa. This awakening all her tenderness, occasion'd those celebrated letters ...which give so lively a picture of the struggles of grace and nature, virtue and passion. (Pope 252)

冒頭に付された “The Argument” において、Alexander Pope は *Eloisa and Abelard* (1717) を書くに至った経緯をこのように説明している。ここではっきりと主張されているように、彼がかの Eloisa の物語を韻文化しようと試みたのは、そこに描かれた “struggles of grace and nature, virtue and passion” に魅せられたからであるということは疑いない。十二世紀の著名な神学者 Abelard とその教え子 Eloisa との恋愛は、彼女の叔父の Fulbert (一説には彼女の父親とも言われる (Radice 16)) による、嫉妬めいた妨害によって引き裂かれ、その結果 Eloisa は、規律の厳格な中世の修道院での生活を余儀なくされることとなる。しかし、その未だ消えぬ Abelard への想いが、彼の書簡を手にしたことで再燃した。そ

んな Eloisa の本能的な情熱と宗教的慣習・美德との狭間に揺れる心の葛藤に共感した Pope が、その想いを出来るだけ忠実に綴ろうとしたのがこの作品である。しかしながら、この詩が十八世紀以降、宗教的な観点から高く評価されたことはない (Reeves 161)。宗教的探求の深刻さは疑問視され、宗教生活に関する偉大な詩と評価されたこともない。それどころか公正・道徳といった点においてもしばしば批判されてきた。その理由の一つは、この詩の真髄とも言える、177 行目から始まる Eloisa の葛藤と、その収束に関係している。というのも、葛藤の最後に、彼女は自らの死を求めているからである。無論、自らの罪を悔悟し、Abelard に看取られて神のもとへ旅立ちたいという詩行からは、そこへ至るプロセスには多少の矛盾があるものの、Eloisa は神を信じ、神に全てを委ねようとしていると解釈できる。しかし宗教的には自殺は禁じられているのであり、死を希望するというかたちの悔悟は到底受け入れられない。さらに、自らの死によって葛藤を終わらせようとするのは、神を選んだというわけではなく、単に葛藤に疲れたためであり、一時的な静止状態に陥っているに過ぎないとも解釈できる (Morris 136)。この見方に立てば、自殺の問題以前に Eloisa は、神と愛人との間での選択を結局どちらとも決められずに放棄してしまっていることになる。このように神を選ぶことの出来ない Eloisa の葛藤に宗教的価値が与えられないのは当然である。さらに、この詩が宗教的に評価されないのは、こうした葛藤の収束を巡る解釈によるばかりではない。詩の随所に見られるエロティシズムもまた宗教的不敬を助長してしまっているように思われる。それでは、このようにまるで宗教界からの非難を敢えて招いている観さえある Pope の態度には、何か意図があるのだろうか。

Eloisa の sympathy

Windsor Forest (1713) に続いて書かれた *Eloisa and Abelard* と、これに続く *Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady* (1717) の二編の詩は、*Windsor* における欠点を大いに克服しており、その意味で Pope の作品の里程碑を成すというのが、大方の批評家の一致した見解である。*Windsor* では、詩のテーマ上の重要な事柄に対しても、またそれほど語る必要のない些細な事柄に対しても、若き詩人が同程度に力を注いだ結果、幾分散漫な内容に墮してしまっている。さらに、文明、国家、商業という主意 (tenor) を伝えるための隠喩 (vehicle) も、比喩的表現そのものの卓越性は認められるにせよ、詩全体のまとまりから言えば、互いの足を引っ張

っているという観は恐らく否めない。そのようなテーマ上の、そして表現上の散漫さが見事に払拭されたのが、*Eloisa* である。互いに対して排他的とならざるを得ない宗教的感情と世俗的感情の葛藤というテーマに終始こだわろうとする詩人の想いは、*Eloisa* を表現する際に用いられる比喩的表現においても一貫している。彼女自身をあるいは彼女の世俗的感情を表す換喩 (metonymy) は、紛れもなく “burning flame” である。

There stern religion quench'd th' unwilling flame, (39)

Let tears, and burning blushes speak the rest. (106)

The torch of *Venus* burns not for the dead; (258)

Ah hopeless, lasting flames! like those that burn
To light the dead, and warm th' unfruitful urn. (261-2)

In seas of flame my plunging soul is drown'd,
While Altars blaze, and Angels tremble round. (275-6)

Eloisa の “nature” そして *Abelard* に対する “passion” は、このように燃え盛る炎のイメージとして提示されているが、その殆どが、死、及び地獄のイメージと結び付けられているのは、もちろん偶然ではない。当代の著名な神学者である *Abelard* に教えを受けた彼女は、自らの時代の宗教的信条によって、自身の罪が永遠の罰に値することを承知している。とりわけ、*Yasmine Gooneratne* も言うように、275 行目における “seas of flame” が、黙示録第 19 章 20 節の “lake of fire burning with brimstone” を髣髴させるものであってみれば (*Gooneratne* 63)、彼女の苦悩とは自らの passion によって地獄に落ちねばならないということに他ならない。そしてその彼女を苦しめる罪とは、キリスト教神学に定められた「七つの大罪」(the seven deadly sins) の一つ、欲望 (lust) であることもまた明白である。すなわち *Eloisa* は *Abelard* に対する性的欲望によって、あるいは彼との性的交渉によって苦しめられているのであり、彼女の葛藤とは、言い換えれば love of God と lust for *Abelard* の葛藤である。愛人に対する官能的な描写は、ヴェールの掛かった比喩によって至るところに散りばめられている。たとえば

“the soft intercourse” (57)、“the paths of pleasing sense” (69)、“unholy joy” (224)、“swelling organs” (272) という表現などであるが、さらに以下の詩行にも見られる。

But let heav'n seize it, all at once 'tis fir'd,
Not touch'd, but rapt, not waken'd, but inspir'd! (201-2)

このように、神への愛は「触れることなく、恍惚に至らしめてくれる」というのは、まぎれもなく Abelard への愛が肉体的なものであるということの裏返しに他ならない。

Pope がこの詩編を書く拠り所としたのが、John Hughes の *Letters of Abelard and Heloise* (1713) であり、それは、もとのラテン語による手紙をよりロマンティックなものにしたフランス語バージョンの英訳であった。この翻訳本は Eloisa と Abelard との間に交わされる数編の書簡から構成されるものだが、Pope が焦点を当てたのはその書簡の中でも、最も早い時期のものである。というのもその箇所は、Abelard の書簡を初めて目にしたショックと、それによって引き起こされる二人の過去への強烈な追憶によって、書き手としての Eloisa の感情が最大に高まっていることが感じられるからである。そしてこの書簡の最初の部分を、エッセイではなく韻文形式で表現したのは、Gooneratne も言うように (Gooneratne 57-8)、まさにこの感情の強烈さを生き生きと捉えたいという意図があったためと思われる。もちろん英雄対韻句 (heroic couplet) という、Dryden によって、演繹的に論を展開するために、あるいは政治的風刺のために用いられ確立された警句的な脚韻法には、個人としての恋愛感情の高まりを表現するのに限界があるということとは否めない。あるいは、Chaucer や Shakespeare と違い、Pope には情熱と修辞法を合致させねばならないという意識が欠けているとも評される (Reeves 158)。一方で David B. Morris は、この詩は、Pope の作品の中でも、とりわけより大きな割合で脚韻を外しているが、その不完全な脚韻の不快な音こそ、Eloisa の内なる不調和 (不協和音) を強調するものであると解釈する (Morris 134)。さらに Gooneratne によれば、行半ばの休止による展開と対を成す脚韻は、Eloisa の想いが知性と感情の間で揺れ動くときに体験する葛藤を、感覚的に十分に理解され得る弧 (消沈しかけた思いがまた不意に掻き立てられるような曲線) を描いて、伝えるためであると言う。つまり中間休止 (caesura) 及び couplet は、理性とそれに敵対する感情との拮抗 (バランス)、すなわち葛藤を表現するために役立っていると判断す

るのである (Gooneratne 61)。以下に一例を挙げておく。

I view my crime, / but kindle at the view
 Repent old pleasures, / and solicit new:
 Now turn'd to heav'n, I weep my past offence,
 Now think of thee, and curse my innocence. (185-8)

このようにこの詩における Pope の heroic couplet を巡る評価は批評家の間で必ずしも一致するものではない。しかし、その是非はともかくとして、ここで注目したいのは、彼が Eloisa の激しい葛藤を韻文化するに際し、典拠とした書簡そのままの書簡体というスタイル (heroic epistle) を取り入れたという事実である。An *Essay on Criticism* (1711) のようなエッセイ詩でもなく、*Rape of the Lock* (1714) のような叙事詩としてでもなく。

もちろん heroic epistle という形式は、Pope のオリジナルではない。Michael Drayton (1563-1631)、Samuel Daniel (1563-1619)、John Donne (1572-1631) など多くの先例があった。そして彼らに見られる特徴とは、“passion” “elegance” “purity” である。しかし Pope に関しては、あえてより厳格な、オウィディウスの *Heroical Epistles* における定義に立ち返ったと言わねばならない。その定義とは人物は歴史上の人物であり、そして男性に見捨てられた女性であらねばならないというものである (Reeves 157)。オウィディウスに則り、歴史上の人物を登場させて heroic epistle を書き上げようとした Pope の意図は、やはり、事実としての人の心の激しい動きを提示したいということであったのは疑いない。しかしながら当代風にせよ古典風にせよ、書簡という形式を取り入れた Pope の目的は、それだけではないように思われる。

先に述べたように、Eloisa の魂は love of God と lust for Abelard の間で揺れ動くのであるが、当然、修道院にいる彼女にとって、肉体的な交わりは不可能である。そのような状況の中で、Abelard への想いを断ち切れない Eloisa が求めるものは、修道院という宗教的監獄から抜け出し、Abelard のもとへと飛んでゆくことである。無論、魂として。

Love, free as air, at sight of human ties,
 Spreads his light wings, and in a moment flies. (75-6)

If there be yet another name more free, (89)

When love is liberty, and nature, law: (92)

Then conscience sleeps, and leaving nature free,
All my loose soul unbounded springs to thee. (227-8)

ここに何度も繰り返される “free” そして “liberty” という想いは、“conscience” という宗教的束縛から逃れたいという Eloisa の心情を、そして宗教的慣習によって抑えることの出来ない Abelard への想いを如実に物語る。そして飛び立った彼女の魂が求めるものこそ、“the soft intercourse from soul to soul” (57) に他ならない。肉体的な “intercourse” が叶わない今、Eloisa が求めるものは魂と魂との “intercourse” である。そしてそれはまさに、互いに対する sympathy によって得られるものに他ならない。

Ah more than share it! give me all thy grief. (50)

And each warm wish springs mutual from the heart. (96)

The crime was common, common be the pain. (104)

このように、互いの悲しみを分かち合い、互いの幸せを願い、互いの痛みを感じ合う sympathyこそ、今の彼女にとっての、Abelard との交わりであり、悦びなのである。そのことは、神学者である Abelard が、必ずや熟考し答えを説明しようとするに違いない神学的な問題を提示することによって、二人の書簡が継続されることを願っているという、彼女のその後の書簡 (Pope がこの詩の典拠にしたものより後のもの) の内容からも窺える。つまり Eloisa は継続的な書簡の交換の中で、互いへの sympathy を持つことにより、精神的な悦びを得たいのである。このように、Pope がエッセイあるいは叙事詩ではなく、書簡体という形式をあえて選んだのは、返事を交わすことによって Abelard の sympathy を得たいという Eloisa の心情こそ、彼女の真の願いであると感じたからであろう。

sympathy の欠如した Abelard

Abelard もまた Eloisa 同様、いくつかの *metonymy* によって提示されているが、彼の場合は、Eloisa による書簡においてのみ提示される対象であってみれば、また、“his lov’d Idea” (12) という表現が示すように、彼女の書簡の中でいわば作り出されている存在である限りは、勢い、観念的な存在とならざるを得ない。それはまた彼女の最大の願いである *sympathy* の求めに対する反応として描かれる存在でもある。しかしながら、Abelard を表す *metonymy* は Eloisa のそれとは正反対の対照的なイメージを伝える。

Relentless walls! whose darksome round contains
 Repentant sighs, and voluntary pains;
 Ye rugged rocks! which holy knees have worn;
 Ye grotts and caverns shagg’d with horrid thorn! (17-20)

無情な壁、ごつごつとした岩肌、茨の洞窟。このように、彼女を苦しめ、あたかも監視しているかの如くに存在する修道院。この Abelard 自身によって建立された Paraclete 修道院こそは、紛れもなく、Abelard そのものであると言える。続けて Eloisa は明喩 (*simile*) によって、Abelard を具現する修道院へと悲嘆を投げかける。“Tho’ cold like you, unmov’d, and silent grown, / I have not yet forgot my self to stone” (23-4)。これらの “cold,” “unmov’d,” “silent,” “stone” という *metonymy* は、まさに Eloisa の “passion” を表す “burning flame” のイメージとは正反対のものである。先に、Eloisa の “passion” と heroic couplet との不調和の問題に触れたが、教訓的で、説得力のある couplet にこそ、Eloisa の手紙に対して神学的な観点から厳格な返事を送る Abelard 自身が投影されていると言えよう。先にも述べたように、Abelard が Eloisa の手による書簡において、彼女の観念の中でのみ存在している対象であるからには、つまり、この詩が彼女自身と、そして彼女の作り出す Abelard のイメージの両方を映し出すものであるからには、情熱的な内容と、一方で、それを諷め抑えようとするかのような、警句的な couplet という形式こそ、まさにその不調和ゆえに Eloisa の心情を反映していると言えるのではないか。さらにこうした彼女の心情は、文体においてのみではなく、詩行のあちこちにちりばめられた撞着語法 (*oxymoron*) によっても窺い知ることができる。つまり “voluntary pains” (18)、“that sad relief” (49)、“delicious poison” (240)、“severely kind”

(249) のような表現においてである。これらの互いに相反するイメージの結び付きは、彼女の心の中の二律背反を表現するのに役立っているようだ。

かくして Abelard は Eloisa の求める sympathy に対して、応えることの出来ない sympathy の欠如したイメージを持つ存在として提示されている訳だが、このように Abelard が描かれる最大の理由は何か。それは恐らく彼が情熱を、つまりは Eloisa の求めに応じる lust を喪失してしまっているからではないかと思われる。すなわち Abelard は、去勢 (castration) によって肉体的な欲望が奪われてしまっている以上、彼女の持つ lust には応えることが出来ないのであろう。Stephen Bygrave は、Pope の “The Argument” では Abelard の castration は言及されていないので、この詩はそれ以前の、つまり、Eloisa がこの事実を知らない段階での彼女の想いを綴ったものであるとするが、それでも、Abelard が Fulbert の私的な恨みによって蒙ったこの悲惨な出来事は、詩中に暗示されていると言わねばならない。実際 Joseph Warton そして Owen Ruffhead 等は、彼女が恋人の嘆かわしい不幸の性質に触れる時の遠まわしで繊細な表現を賛美しているのだから (Bygrave 126)。しかしながら遠まわしで、オブラートに包まれた、ともすれば見落としてしまいがちな表現とは全く異なる生々しい言及も見られる。すなわち “A naked Lover bound and bleeding lies!” (100) という一節である。婉曲的で繊細な表現的技巧を高く評価されているはずの詩人が、何故、この悲惨な、到底詩的なものとは解され得ない描写を敢えて試みたのか、疑問が生じる。Reeves はこの作品は、当時の読者の大半が良く知っている物語を題材にし、Pope もそのことを承知していたはずだと指摘する (Reeves 158)。だとすれば、この赤裸々に描かれた詩行は、当時の読者に Abelard の不幸な事実を思い出させようと、敢えて衝撃的に表現されているのではないか。物語を既に知っている読者は、この詩行が示すものを即座に理解できたはずである。故に、詩人は敢えてこのような表現を試みることによって、恋人からは sympathy を得られない Eloisa のために、悲惨な事実を読者に再認識させ、読者からの sympathy を引き出そうとしたのではないだろうか。

この情緒的な詩は、大衆を喜ばせ、感動させるという目的で、入念に書かれていると評される (Reeves 153)。そのような評価は Pope が劇的な効果を意識していたということの一つの表れであろう。また Morris が “The poem might seem almost contrived to illustrate Dryden’s analysis of Ovidian technique. Eloisa’s love for Abelard and her duty to God ... provide the ingredients for dramatic tension” (Morris 137) と語るように、まるで詩を劇の特質に織り込むことを試みているとさえ思わせる。たとえば、葛藤のクライマックス、死出の用意をする Eloisa が “Suck my last

breath, and catch my fling soul!”と Abelard へ呼びかける。しかしすぐ続けて “Ah no – in sacred vestments may’st thou stand,” (324-5) と語る件は、まさに一人芝居を演じているかのごとくである。詩中何度も繰り返される自分自身に対する三人称での呼びかけもまた同様の効果をもたらしているようだ (“And *Eloisa* yet must kiss the name” (8), “In vain lost *Eloisa* weeps and prays” (15), “yet *Eloisa* loves” (260))。確かに、詩の終わりの “And drink the falling tears each other sheds” (350) という互いの涙を呑みあうという描写は、“The baroque, indeed faintly comic, picture ... gives a work of quite considerable achievement an unfortunate end”とも評される (Gooneratne 64)。また詩全体にも幾分センチメンタリズムに走りすぎた印象があるのも否めない。しかし観客たちがいわゆる詩的正義 (poetic justice) に専心していた当時であって (Morris 139)、まさに Shakespeare をも髣髴とさせる運命論的な悲劇を展開しようとした点は評価されるべきであろう。部分的な描写によって全体のテーマが損なわれるか否かは評価の分かれるところであろうが、いずれにせよ、こうした劇的な効果、あるいはセンチメンタリズムによって Pope が意図したのは、誇張的に表現することで、*Eloisa* へのより大きな sympathy を人々の心に呼び起こすことだったのではないか。当時新たに流行しつつあったゴシック的なイメージや設定を取り入れたのもやはり、人々の興味に訴え、より多くの sympathy を求めるといふ狙いがあったのかもしれない。

Eloisa とそれに続く *Elegy* が自伝的要素を、すなわち、Pope 自身の恋愛体験を暗示しているというのは定説である。とりわけ最終行の couplet は、海外へ出かけて留守にしている魅惑的で知性的な女性 Lady Mary Wortley Montagu への Pope の情熱として読まれてきた。しかし John Butt によると、仮にこの詩の来歴が Martha から Mary へと Pope が方向転換を始めていることを示すとしても、この詩の個人的な隠された感情の大半は、二人に同様に当てはまるということになる (Reeves 156-7)。Martha とは Pope の家族が親しくしていたバークシャーのカトリック系の信徒団体を通じた友人の一人である。Reeves によれば、Pope の恋愛は礼儀あるものではなく、ロマンティックで、その分自己執着した幻想であり、それが *Eloisa* に反映されているという。その解釈の根拠を彼はこのように語る。

... partly because he was able to watch them as a privileged and indulged exile. He could be treated as a potentially serious lover could not be treated. The result was that his affection became distorted. (Reeves 153)

幼い頃に脊椎カリエスを患い、12・3才で骨の成長が止まり、背骨が後方と側方に歪んでいた Pope。そんな彼を、蔑みや憐れみを持たずに扱ってくれる穏やかで sympathy のある女性として Martha は彼の書簡の中にしばしば登場している。彼女が Pope へ示す sympathy こそは、Eloisa の sympathy となって詩に反映されているように思われる。しかるに、先の引用にあったように、Pope の愛情は歪んだものであり、Martha への彼の手紙は “... a curious blend of smut and sentimentality which is deeply disquieting” (Reeves 153-4) といった体である。Martha の sympathy に素直に応じることの出来ない詩人。この意味において Pope はまさに Eloisa の sympathy に応えられない Abelard を髣髴させる。Jean Hagstrum は 1717 年 6 月の Pope の手紙に見られる Lady Mary への内気さは、“Lady Mary may perceive an identification between himself and the emasculated Abelard” と示唆するが (Hagstrum 126)、確かに Abelard の castration は、自らの病気のために恋人としての可能性の無い男性のように扱われる Pope 自身を思わせる。Eloisa に対して sympathy の欠如した Abelard。けれども彼は Pope 自身との同一性を思わせるという意味において、Pope との間に sympathy を通わせている存在と言える。

Pope の sympathy

And sure if fate some future Bard shall join
 In sad similitude of griefs to mine,
 Condemn'd whole years in absence to deplore,
 And image charms he must behold no more,
 Such if there be, who loves so long, so well;
 Let him our sad, our tender story tell;
 The well-sung woes will sooth my pensive ghost;
 He best can paint 'em, who shall feel 'em most. (359-366)

やがて自らと同じ悲しい体験を持つ詩人が現れれば、二人の不幸を哀れみ歌ってくれるかもしれない、「彼は私の悲しみをもっとも感じてくれる人」だからというこのエンディングの 8 行は、かねてより様々に解釈されてきた箇所である。とりわけ、修道院の中から語っていた Eloisa が、その壁の外側に立った視点から語っているということで、劇のプロローグあるいはエピローグとしての機能を果たしていると言われる。また、この数行では、視点が女性である Eloisa のそれから

男性としての Abelard のそれに入れ替わっている。あるいは *Eloisa* は 358 行目で終わるべきだったとも評される。それは “the eight additional ones ... are languid and flat, and diminish the pathos of the foregoing sentiments. They might stand for the conclusion of almost any story” (Bygrave 127) という理由からである。確かに、先の 2 つの視点に関する解釈にはそれなりの妥当性はあると思われる。しかしながらこの必要ないという見方はどうであろうか。というのも、少なくとも、この自らの死後に関するエンディングを予示 (foreshadow) する詩行が本文中に盛り込まれているのだから：

See in her Cell sad *Eloisa* spread,
 Propt on some tomb, a neighbour of the dead!
 In each low wind methinks a Spirit calls,
 And more than Echoes talk along the walls. (303-306)

今死なんとするその時、呼びかけてくれる “a spirit” こそは、紛れもなくエンディングに登場し、彼女の痛みを感じ、その悲しみを歌ってくれる sympathy を持った詩人その人であろう。そして更にこのエンディング自体が、*Elegy* に対する更なる foreshadow をなすと思われる。それはちょうど *Windsor* の最終行が *the Pastorals* (1704) の *Spring* の第一行へと繋がっている如くである。

What beck'ning ghost, along the moonlight shade
 Invites my step, and points to yonder glade?
 'Tis she! - but why that bleeding bosom gor'd,
 Why dimly gleams the visionary sword? (1-4)

Elegy の冒頭にある、この月影から合図を送り、胸から血を流している女性の墓へと、書き手である詩人を導いている “ghost” というのは、まさしく、*Eloisa* のエンディングの *Eloisa* 自身の “pensive ghost” と重なる。そしてその後、*Elegy* のテーマとも言える問いかけが続く。

Is it, in heav'n, a crime to love too well?
 To bear too tender, or too firm a heart,
 To act a Lover's or a *Roman's* part?

Is there no bright reversion in the sky,
For those who greatly think, or bravely die? (6-10)

“To act ... *Roman's part*”とは自殺を意味するが、ここで Pope は、自殺に対するローマカトリックによる非難という問題を考察し、天は恋愛ゆえの自殺に対してさえ慈悲を示せないかどうかを問うている。つまり、彼は、ローマカトリックという宗教に対し、恋愛のために命を絶ったものに対して sympathy を持つよう促していると解釈され得る。というも “Unfortunate Lady” に sympathy を示すことの出来なかったその家族たちには、永遠の呪いがかけられるようにとこの詩はさらに展開してゆくのだから。そしてこれこそは、まさに *Eloisa* にも共通するテーマであると言えるのではないか。ローマカトリックに対する言及は、*Eloisa* における、壮麗あるいは虚飾、そして華やかで恐ろしい犠牲というイメージの中に、たとえば “all the pomp” (274) や “the pomp of dreadful sacrifice” (354) という表現の中に、見て取ることが出来る。*Eloisa* に対して、そして “Unfortunate Lady” に対して sympathy を示すことのない宗教。冒頭の問題に立ち返れば、つまり、神か愛人かの選択を死によって解決しようとする *Eloisa* には宗教的悔悟は認められないという非難は、裏を返せば、それは Pope 自身によるカトリックに対しての批判的な姿勢があったが故に向けられたものではなかったか。すなわち、恋愛のために命を落とすことが宗教的に認められないのなら、代わりに自分が sympathy を示してやろうという Pope の意図。そのような思いが、挑発的とも取れる、宗教界からの非難を敢えて招いているかのような、不敬な描写にも繋がっていると思われる。エンディングに歌われる悲しみを理解してくれる「詩人」(“Bard”) は、まさに自らの病気のために恋愛を成就できないと感じている Pope を思わせる。その意味において *Eloisa* の葛藤がたとえ死に帰着することになっても、彼女は Pope による sympathy によって救われることであろう。

Works Cited

- Amarasinghe, Upali. *Dryden and Pope in the early nineteenth century: A study of changing literary taste 1800-1830*. Cambridge: Cambridge University Press, 1962.
- Atkins, G. Douglas. *Quests of difference: reading Pope's poems*. Kentucky: The University Press of Kentucky, 1986.
- Atkins, J. W. H. *English Literary Criticism: 17th and 18th centuries*. London: Methuen & Co. Ltd., 1951.
- Barnard, John, ed. *Pope; the critical heritage*. London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 1973.

- Blamires, Harry. *A History of Literary Criticism*. London: Macmillan Education Ltd, 1991.
- Bloom, Harold. *Alexander Pope*. Oxford: Basil Blackwell, 1985.
- , ed. *Alexander Pope's The Rape of the Lock*. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Brown, Laura. *Alexander Pope*. Oxford: Basil Blackwell Publisher Ltd, 1985.
- Bygrave, Stephen. "Missing parts: Voice and spectacle in *Eloisa to Abelard*." *Pope New contexts*.
- Collins, A.S. *Authorship in the Day of Johnson*. London: Robert Holden & Co. Ltd., 1927.
- Fairer, David, ed. *Pope New contexts*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1990.
- Ferguson, Rebecca. *The unbalanced mind: Pope and the rule of passion*. Brighton: The Harvester Press, 1986.
- Fitzgerald, Robert, trans. *The Aeneid Virgil*. New York: Random House, Inc, 1990.
- Gooneratne, Yasmine. *Alexander Pope*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976.
- Gordon, I. R. F. *A Preface to Pope*. London and New York: Longman, 1993.
- Hagstrum, Jean. *Sex and Sensibility: Ideal and Erotic Love from Milton to Mozart*. Chicago: University of Chicago P, 1980.
- Ingram, Allan. *Intricate laughter in the satire of Swift and Pope*. London: The Macmillan Press Ltd, 1986.
- Jarrett, Derek. *England in the Age of Hogarth*. Bath: The Bath Press, 1996.
- Lovejoy, Arthur O. *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*. London: Harvard University Press, 1936.
- Melville, A. D., trans. *Ovid Metamorphoses*. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Morris, David B. *Alexander Pope: the genius of sense*. Cambridge: Harvard UP, 1984.
- Pepys, Samuel. *The Diary of Samuel Pepys*. Ed. Richard Le Gallienne. New York: The Modern Library, 2001.
- Plowden, G. F. C. *Pope on classic ground*. Ohio: Ohio University Press, 1983.
- Pope, Alexander. *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. New Haven: Yale University Press, 1963.
- Radice, Betty, trans. *The Letters of Abelard and Heroise*. London: Penguin Books, 1974.
- Reeves, James. *The reputation and writings of Alexander Pope*. London: Heinemann, 1976.
- Rumbold, Valerie. *Women's Place in Pope's World*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- Schwartz, Richard B. *Daily Life in Johnson's London*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1985.



消印は Jefferson—*Light in August* における郵便

沖野 泰子

SYNOPSIS

In Faulkner's novels, the mail system and its materials are used as interesting elements. From the first novel to the novels written in the '50s, there are a lot of letters and other things connected with the mail. Additionally, not only the letters but also things like notes or memos are used in his works. We usually think that letters connect a person to others and that they are very important as good tools of communication. Examples of such use are abundant in American literature. We generally think connecting with others is a positive thing, but on the other hand, mails have bad effects as well on the characters in Faulkner's novels. This essay is an attempt to show that mail systems are the bond for characters in *Light in August*. Seemingly, this novel can be read as a quest story, but I'd like to show that it has another quality by studying the subtle use of the mail.

序

Faulkner が小説を書き始めた頃から、郵便およびその制度に関心を向けていたことを示す例は多々ある。たとえば長編第一作の *Soldier's Pay* では書簡そのものが数回にわたって描かれており、手紙が郵便制度にのって届けられることにより生じる時間、空間のズレが登場人物の間の感情のズレを象徴する結果になっている。*The Sound and the Fury* では時計の音同様に、ポケットに忍ばせた一通の手紙がたてる音が Quentin のオブセッションを象徴していた。また *Absalom! Absalom!* においても、手紙がプロットの展開に重要な役割を担っている。郵便制度が物語の中でさまざまな意味を持つ傾向は 1950 年に発表された *Requiem for a Nun* に至るまで続き、この中では郵便制度そのものが Jefferson の町の成立に関わるなど、Faulkner の興味を色濃く反映している。そこに至るまでの二十数年間に発表された短編においても郵便(制度)を Faulkner はさまざまに使っている。また Faulkner が故郷の町を切手一枚ほど、とたとえたことはあまりにも有名だが、こうした発言も郵便に対する関心の表れと取ってよいだろう。

ところで一般的には手紙や郵便物、郵便制度などは人と人を繋ぐというイメージが強い。たとえば南北戦争を背景にした *Cold Mountain* において、瀕死の重傷

を負った主人公の南軍兵士 Inman が生死の淵をさまよっているときに、「帰ってきてほしい」と書かれた恋人 Ada の手紙が読み上げられると、反応を示す場面がある。手紙が死の淵から人を引き戻すほどの強い力を持つのだ。また映画 *The Postman* はまさに人と人をつなぐ郵便配達人が崩壊しかけた世界を再び繋ぐという設定になっている。人と人をつなぐことが肯定的に捉えられているのである。だが Faulkner の小説において郵便（制度）はむしろ逆の結果をもたらすものとして描かれることが多い。厄介を引き起こす種になる、あるいは感情のズレを象徴する場合もあるのだ。本稿では、一見クエスト・ストーリーのように見える *Light in August* が、実は自己探求、自己実現を阻む物語であるということを、郵便（制度）のモチーフを検討することで明らかにしたい。但し *Requiem for a Nun* に至るまで、郵便（制度）の描かれ方はさまざま、一貫したイメージが出来上がっているとは言えないことに鑑み、今回は郵便物に加え、郵便制度にのらない手紙、あるいは書置き、伝言なども含め手紙の原型を成すものを含めて議論することを断っておきたい。

I. 手紙の書けない人たち

誤配、転送——Lena Grove の場合

物語の初めから Faulkner は郵便（制度）にまつわるものを登場させる。Lena が兄一家と住む集落は、一番栄えていた時代でも郵便年鑑には載っていなかったと、その寒村ぶりを語るのに郵便制度を用いる。また、この描写の直後に物語の中に鉄道の駅、さらには貨客列車の描写が出てくる。この列車は一日一本きりで、必要があれば赤旗を立てて止めるのだが、この列車がさまざまな郵便物なども運んできたことは想像に難くない。鉄道網の発達に伴い、南北戦争後、第二次世界大戦頃まで、効率よく郵便物を届けるために郵便局そのものが列車の中に作られていたほど、郵便物の輸送は鉄道に大きく頼っていたからである。¹

この寒村で暮らしていた Lena は、興味深いことに、未来の夫と考える Lucas Burch に対して手紙を送らなくてもいいと言った、と述べている。妊娠が兄に知られたとき、Lena は Lucas が迎えをよこすと言ったと主張して譲らなかった。そして立ち寄る先で Lucas の居所がはっきりしないことの言い訳として、“I [Lena] told him [Lucas Burch] I would not expect him to write, being as he aint any hand for letters. ‘You just send me your mouthword when you are ready for me,’ I told him. ‘I’ll be waiting.’” (20) と説明しているのである。この言葉が示すように、恐らく Lucas

は階級的には低い層に属し、あまり教育も受けていなかったのであろう。加えて Lena と結婚し、子供を育てる気などない Lucas が手紙はおろか伝言をよこすはずもない。現に二人が Jefferson で再会し、Lena が出産したことがわかった直後、あれほど固執した千ドルの賞金を受け取ることを忘れ、慌てて逃げ出した Lucas の様子は滑稽ですらあった。このとき小屋から去る Lucas を見て Lena が、「また起き出さなくては」とつぶやいたことを見れば、彼女が Lucas の迎えを本気で期待していないことは明らかだろう。さらに彼女が移動すれば、もし仮に Lucas が手紙を送ったとしても、その手紙は届かないことになる。ここではコミュニケーションの手段としての郵便に、Lena が何の期待も抱いていないことが読み取れるのである。

Lena はしばしば、素朴で健康な娘で、大地の象徴などと言われているが、なかなかたくましく、したたかな面も持っている。それどころか、計算に基づいた行動をしているかのような描写がいくつも見られる。たとえば Jefferson へ向かう途中、農夫とその知り合いの Armstid の横を通り過ぎるとき、Lena はこの二人に素早く目をやるが、Armstid はそのことに気付かない。その後道の端で腰を下ろし Armstid を待っていた Lena は、その馬車に乗せてもらい、家にも泊めてもらうのである。さらに人に問われもせずとうとうと自分の成り行きを語ってみせ、人がそれを信じているかどうかは気にもしない。食事をする際も、自分では lady が食事をするときのように食べたと思いついたことからもわかるように、自らを演出しながら食べている。ところが語り手は、“He [Armstid] watched her eat, again with the tranquil and hearty decorum of last night’s supper, though there was now corrupting it a quality of polite and almost finicking restraint.” (23) と言う。「細心の注意を要する慎重」と語り手が述べるように、Lena の振る舞いがおそらく日常のそれとは違うことが他者の目にも明らかなのだとしたら、結局ここでも Lena は自己演出に失敗しているということになるだろう。

住所不定につき—— Lucas Burch の場合

Lucas は Lena に対して一度も手紙を書いてはいない。だが物語の中で一度だけ手紙を書く場面が出てくる。Joanna Burden 殺しの犯人の情報を提供したものに 1000 ドルの賞金が出ることから、彼は Christmas を告発するが、なかなかその賞金を受け取ることができない。そして Lena の登場により、彼は Jefferson から逃げ出そうとするが、何とか賞金だけは手にしたいと思い、次のような手紙を書いた。

*Mr Wat Kenedy Dear sir please give barer My reward Money for captain Murder
Xmas rapp it up in Paper 4 given it toe barer yrs truly (436)*

発音される音のとおりに書かれた、綴りもパンクチュエーションも文法も間違いだらけの手紙である。書き手がきちんとした教育を受けていないことは明白であろう。このような人物にとって、文字を書くという行為自体、骨の折れる作業であることも想像に難くない。Lucasの賞金に対する執着心が強く現れている手紙である。

そのあとに次のような描写が続く。

He does not sign it. He snatches it up, glaring at it, while the negress watches him. He glares at the dingy and innocent paper, at the labored and hurried penciling in which he had succeeded for an instant in snaring his whole soul and life too. Then he claps it down and writes *not Sined but All rigt You no who* and folds it and gives it to the negro. "Take it to the sheriff. Not to nobody else. You reckon you can find him?"

"Yes," Brown says. He takes a coin from his pocket. "Here. And if you bring me back the answer to that inside of an hour, I'll give you five more like it." (436)

ここに描かれている Lucas が駄賃を渡して手紙を届けさせる行為は、いわば郵便の原型と言えるだろう。自分で届けるのではなく他者に託すのである。Lena に対して一度も手紙を書いたことのなかった男が書いた手紙は、精魂込めた、自分のもてる力をすべて注ぎ込んだものであった。しかしここに署名をしなかったことに注目すべきだろう。つまり Lucas は差出人としての自己を明らかにしないのである。さらに、返信を受け取るために指定した場所に Byron Bunch が現れたため、彼はその場から逃げ出してしまった。差出人が確定されず、返信の配達場所も明記されていなければ、返信は届くはずもなく、彼は賞金を受け取ることもできない。Lena と出会った Doane's Mill から転々と移動し、Jefferson では Brown と名乗り、自らの所在を明らかにしてこなかった Lucas が、今後もその所在を明らかにしない、手紙を受け取ることはできない存在であることを象徴的に表していると言えよう。そしてこのことは、奇しくも Jefferson で Lena と再会する直前に副保安官と交わした言葉、"I'm a stranger here." "You'd be strange anywhere you was at."

The deputy said. “Even at home. Come on.” “I’m a American citizen.” (426) と相俟って、さらに強く読者の意識に刻み込まれるのである。そして Lucas の名が Burch なのか Brown なのか、あるいはどちらも偽名なのかも物語の中では明らかにされないが、名前がはつきりしないということも、アイデンティティーが定まらないことの現れである。Lucas は物語の中で自己を確定することもなく、漂い続けるのである。

II. 生きながら死せる人びと

伝わらないメッセージ—— Gail Hightower の場合

手紙を書く、書かない、ということの問題にするときには、手紙の書き手の能力も問題になってくるであろう。手紙を書く能力はその人物の知的レベルを示すもので、物語の中でも、きちんと手紙を書くことができるのは、Joanna と Hightower に限られている。そこで、次に Hightower について考えてみよう。Hightower の家の本棚には Byron Bunch が聞いたこともないような宗教と科学と歴史の書物が並んでいた (63)。祖父は弁護士、父は牧師兼医者という家庭環境に加え、非常な読書家で神学校を卒業している Hightower にとって、手紙を書く行為は Lucas のような苦勞を伴うものであるはずもない。もちろん Lucas が書く手紙と自ずと違ってはるはずである。

では、Hightower はどんな手紙を書いたのだろうか。神学校時代、妻と結婚する前には、木の洞に互いに手紙 (“notes”) (479) を置いてやり取りしていた。次に、就職活動で自分の売り込みをするために手紙を書いた。そして結婚し、念願かなって Jefferson にやってきたのだから、一見すれば Hightower が書いた手紙の数々は彼に幸運をもたらしたように見える。しかし、妻には不貞をはたらかれ、教会員からは拒否され、彼は結局死んでも同然で Jefferson に一生暮らすことになる。妻と交わした手紙も、就職活動のための手紙も、Hightower にマイナスの結果をもたらすきっかけを作ったことになる。また Hightower は教会の牧師の職を追われてからも、少年院に寄付を続ける。このとき、もともと送金していた額を半分にする旨を知らせる手紙を書かざるを得なかったことは、結局、生涯で一番恥ずかしいことだったと本人は考えているのである。ここでも手紙はマイナスのイメージで描かれている。さらに彼が受け取った手紙は、石つぶてに付けて投げ込まれた、Jefferson の町から出て行けという KKK からの脅迫の手紙であった。南部のこの町に特別な思いを抱いていた男は、周辺部に留まらざるを得ない存在

である、ということが手紙を通して示されている。

また牧師の職を辞して後、生計を立てるためにクリスマスカードを作ったり、写真を現像する仕事を請け負おうとして出した看板は、次のようである。“So the sign which he carpentered and lettered is even less to him [Hightower] than it is to the town; he is no longer conscious of it as a sign, a message”. (60) つまり Hightower は当初、町の人々に向けてメッセージを発したわけだが、そのメッセージは自らにとっても不要のものになったわけである。さらに、町の人々はそれを受け入れることすらしない。この看板を時折黒人が声に出して読むのだが、その様子は次のようである。

... like Hightower himself, few of the townspeople needed to read them anymore. But now and then a negro nursemaid with her white charges would loiter there and spell them aloud with that vacuous idiocy of her idle and illiterate kind. . . . (58-9)

手紙は他者に何らかのメッセージを伝えるという役割を持つが、この看板もまた当初は Hightower が何かを伝えようとして掲げたものだろう。だが、上の描写を見る限り、この看板に書かれたものにメッセージ性はまったくなく、黒人女はこの看板をただの記号としてのみ読み上げている。Hightower の存在は一見町の景色の一部に組み込まれたようだが、そこには何の意味もなく、彼はいわば記号にすぎないということを象徴するような一文である。

ところで Hightower は、祖父が南北戦争に出征し Jefferson で戦死したエピソードを繰り返し黒人の乳母に聞かされて成長した。鶏小屋に盗みに入って撃ち殺されるという、やや滑稽なエピソードながら、このできごとはしっかりと Hightower の記憶に刷り込まれている。この話を Jefferson の町の人々に語る Hightower の行為は、過去の記憶を物語の現在に呼び起こす作業であり、いわば過去からのメッセージを伝えようとしているのである。人馬が疾走していく様子を教会の説教で述べる Hightower は、狂信的語り部さながらである。文字を書くことになんの抵抗もない Hightower が選んだ形は書いて残す、ではなく、語って伝える、であった。

しかし Hightower が語る過去からのメッセージ、南部の記憶は聴衆には伝わらない。Hightower の妻が亡くなってから、信者たちは Hightower が牧師を辞めることを望み、説教の席から立ち去ってしまうのである。それでもなお Hightower が Jefferson の町に留まることに拘った理由は物語の最後に明らかである。祖父が死んだときにまだ生まれてくる前の自分も死んだのだと思い、その瞬間をもう一度

自分も迎えるためにこそ自分は Jefferson に来たと彼は考えているのである。その瞬間を迎えなければ、彼は生きることができないという逆説的発想であり、平石貴樹はこれを敗北主義と名付けているが、この Hightower の考えにこそ、この物語を解釈する上での重要な鍵が潜んでいる。この点については最後までもう一度考えてみることにする。

差出人不明—— Joe Christmas の場合

生きながら死んでいる人を取り上げるために、次に Christmas について考えてみよう。子供時代、養父が教義問答を教え込もうとするが、Christmas はこれを拒む。養父に言われたように覚えようとせず、むしろ鞭打たれることに陶醉するかのようである。しかしながら、Christmas に対する一定の教育は試みられていたわけで、ある程度は読み書きを習っているのだが、手紙など書くことはあまり得手ではないと推測される。これを裏付ける描写を示そう。

He turned the pages in steady progression, though now and then he would seem to linger upon one page, one line, perhaps on word. He would not look up then. He would not move, apparently arrested and held immobile by a single word which had perhaps not yet impacted, his whole being suspended by the single trivial combination of letters in quiet and sunny space, so that hanging motionless and without physical weight he seemed to watch the slow flowing of time beneath him, thinking *All I wanted was peace* thinking, 'She ought not to started praying over me.' (112)

Christmas が読んでいたのはいわゆる大衆雑誌であり、こういう雑誌を読むのにさえかなりの時間をかけねばならない Christmas の知的レベルがある程度理解できるだろう。さらに、一部分意味が理解できないとき、Christmas の精神状態がまるで宙に浮いたようになっていることに注目したい。

この Christmas が物語の中でただ一度だけ、手紙を書く。

It had been obviously put there by the hand of man, and opened, it proved to be an empty cigarette container torn open and spread smooth, and on the white inner side was a pencilled message. It was raggedly written, as though by an unpractised hand

or perhaps in the dark, and it was not long. It was addressed to the sheriff by name and it was unprintable—— a single phrase—— and it was unsigned. (326)

暗がりですかれたにしても、“an unpracticed hand”や“not long”という語句が示すように、このメッセージの書き手は、書くという行為にあまり親しんでいないことがわかる。宛先はあるのだから、一種の手紙と考えるとよいと思われるが、さらに注目したいのは署名がないことである。タバコと Christmas を結び付ける描写は物語中にしばしば出てくるので、タバコの空き箱を使えば誰が書いたものか、読者には推測がつく。しかしこのメッセージの書き手自身は、自分が誰であるかをはっきりさせようとしていない。アイデンティティーを明らかにしないのである。Christmas が3年間バーデン屋敷に住んでいたことを、Jefferson の保安官は知らなかった。アメリカの典型的なスモールタウンとして設定されている Jefferson において、町の治安を預かる保安官なら知っている当然のことなのではないだろうか。住んでいたバーデン屋敷がいわば治外法権的に扱われてきたといういきさつもあるが、所在を確定したくない Christmas が、うまく身を隠してきた現われと考えられるだろう。Christmas が一度だけ書いた手紙は、彼が自らのアイデンティティーを明らかにしようとしていないという印象を読者に与えるものである。

恐らく Christmas には、自分が白人なのか黒人なのかわからない、さらに言えば、自らを確定したくない気持ちがあったのだろう。外見は白人そのものなので、黒人たちから白人扱いされればその黒人に対して怒り、反対に黒人といるときには、黒人であることを受け入れることを恐れる。Jefferson の黒人街に知らないうちに足を踏み入れたクリスマスは圧倒的な力を感じて、慌ててそこから逃げ出している。丘に登って町を見下ろしたときにも、その一角だけがぼっかり空いた黒い穴だと感じ、恐怖の念を抱いている。つまり Christmas は自分の体の中に黒人の血が流れていることを受け入れることができないのである。Christmas の父親はサーカスの団員で、自分ではメキシコ人だと名乗っていた。しかしサーカスの団長はこの男に黒人の血が混じっていると、Christmas の祖父に告げるのである。それで祖父は自分の孫をクリスマスに孤児院に捨てるわけだが、Christmas の父親は祖父に殺されてしまい、真相は誰にも明らかにされない。先に示した、文字が読めずに宙ぶらりんになる様子は、白人、黒人どちらになることもできず、宙ぶらりんになっている Christmas を象徴しているともいえるのではないだろうか。いみじくも、Christmas が逮捕された Mottstown の住人が彼の様子を、“He never acted like either a nigger or a white man.” (350) と証言しているのである。

III. 手紙が人生を決めた人びと 人生を決める手紙

孤児院にいた頃、Christmas に情事を目撃された栄養士が McEachern と手紙のやり取りをして、この男は Christmas を養子にすることに決める。書簡そのものが物語の中に登場するわけではないが、養父の “I would have thought to talk with Miss Atkins. . . since it was with her I have been in correspondence.” (142) という言葉を見れば、Christmas の人生を左右する出来事が手紙と関わっていることがわかる。Christmas が誕生と同時に父親も母親も亡くし孤児という運命を背負うきっかけになったのは、ただの伝聞だったが、McEachern の養子になったきっかけは書き記された手紙によってであった。このとき栄養士は Christmas が黒人であるとその祖父から聞いて知っていたが、McEachern は孤児院の誰もが口を閉ざしていたので、Christmas が黒人であると考えていなかったようだ。そして McEachern という名前を名乗らせることで Christmas のアイデンティティーを確定しようとする。さらに養父は “He [Christmas] will eat my bread and he will observe my religion.” (145) と院長に語る。つまり養父は Christmas を白人のキリスト教徒（長老派）として確定しようとしたと言えるし、これに手紙が関わってくるのである。しかし、 “He didn't even bother to say to himself *My name aint McEachern. My name is Christmas* There was no need to bother about that yet. There was plenty of time.” (145) と語られるように、Christmas 自身はこれを受け入れてはいないのである。

また、Christmas は知識を身につけることも拒否している。養父は長老派の教義問答を暗記させようとするが、鞭打たれても覚えようとはしない。この抵抗のちに振り返って、 “*On this day I became a man*” (146) とすら考えるのである。ここで前段の繰り返しになるが、養父が Christmas に教えようとしたのは、あくまで白人キリスト教徒としての知識である。つまり白人として確定されることに、Christmas は徹底的に抵抗してみせたのである。そしてこの養父を殺したのも、恋人の Bobbie と踊っているときに、連れ戻しに来た養父が飛び掛ってきたためだが、養父は、 “he believed that he had been guided and were now being propelled by some militant Michael Himself as he entered the room” (203-4) と描かれているように、まさにキリスト教徒的義務感からやってきたのであろう。Bobbie に向かって “*Away, Jezebel!*” (204) と叫んだのちに、 “*Away, harlot!*” (204) と呼びなおしたのも、明らかに神を意識してのことであろう。そして、Christmas に打ちかかっていた

McEachern は Christmas を白人キリスト教徒という枠組みの中に収めようとしたのである。だが、長年の養育に対して、Christmas はまさにこの養父を殺すという形で報いる。そして家へ帰り、養母の「へそくり」を奪い取って、“I didn’t ask you for it, . . . Remember that. I didn’t ask, because I was afraid you would give it to me. I just took it. Dont forget that.” (209) と宣言し、逃走するのである。つまりよき白人キリスト教徒であることを Christmas は自ら拒否したことになる。

消印は Jefferson

人生の転機に手紙に関わる人物として、次に Joanna Burden を取り上げよう。Joanna の父は妻を亡くしたので、北部に住む親戚に手紙を送り新しい妻を探してもらう。そして南部に嫁いできた2度目の妻が Joanna の母にあたる。手紙が取り持つ偶然の縁が Joanna をこの世に送り出したのだ。こういった例は特に広大なアメリカにおいて現実でありそうなことで、Faulkner はそのあたりの事情をうまく小説に盛り込んでいく。² また彼女の名前は死んだ先妻にちなんで名づけられた。このようにして、南部に住んでいながら、Joanna の中には北部人の血しか流れていない、という結果がもたらされた。誕生の時点ですでに、Joanna は Jefferson にあって特異な存在であることが示されている。

Joanna は所在をはっきりと明らかにしている。しかし、生まれてからずっと Burden 屋敷に住み、この町をしばらく離れていると懐かしく感じるぐらいなのに、彼女は町の人に受け入れられてはいない。Joanna 自身が「私たちはヤンキー、よその、敵だった」と述べている。北部からやってきた祖父、それから Joanna の兄は奴隷制度に対する考え方の違いから Sartoris に殺されたのである。

. . . what she received were business and private documents with fifty different postmarks and that what she sent were replies—advice, business, financial and religious, to the presidents and faculties and trustees, and advice personal and practical to young girl students and even alumnae, of a dozen negro schools and colleges through the south. (233)

この引用からもわかるように、Joanna は町の外の人々とは繋がっており、手紙をやり取りすることで人々と繋がることはいわば仕事である。そしてこの仕事を通じて、彼女が随分広範囲の人々と付き合い、頼りにされていることも見て取れる。

しかし自分が故郷と感じる町の白人が Burden 屋敷を訪ねてくる描写も、町の白人住民から手紙が届けられる描写もまったく見られない。誰も Joanna とつながりを持つとはしないのだ。郵便（制度）は一見、人とのつながりを示しているようで、実は Joanna の孤立を浮き彫りにするのである。父から幼い頃に言われた“The curse of the black race is God’s curse. But the curse of the white race is the black man who will be forever God’s chosen own because He once cursed him.” (253) という言葉は Joanna に強い影響を与えているはずである。黒人を自らに課せられた重荷として彼らのために活動しバーデン屋敷に暮らす Joanna の意識と、他の Jefferson の白人住民の意識の間に違いが出てくるのは当然だろう。Joanna が自らのアイデンティティーを確定していることを郵便制度は象徴しているように見えるが、それはあくまで外面的なものにすぎないのである。

ところが突然自分の領域に入り込んだ Christmas と直接繋がろうとして、Joanna が渡す郵便制度に載らない置手紙は、最初のうち、効果があったように見える。この置手紙が、それまで押さえ込んでいた人間の欲望を解き放つのに役立っているようにみえるのである。しかし、居場所を定めることに疑問を感じ始めた Christmas には効果がない。二人の関係が冷えてしまったときに置かれた手紙を Christmas は見なかったが、見なかったことを後悔した。彼女への対処を考えるべきだったということだろう。彼が恐れていることは、所在を明らかにし、自分は黒人だと認めることなのだが、Joanna は学問を身につけるためにそれを認めると迫るのである。黒人大学に入るのに、Christmas が黒人であると認めれば、Joanna の顔で大学に無料で入れる、というのである。学問を身につければ、文字をきちんと学び、手紙を書くことができるようになるのだが、そのために黒人であるということを認めるとなれば、白人キリスト教徒と同じような知識を身につけ、同時に黒人としてのアイデンティティーを確立するわけで、Christmas は自らが逃げたきた両方を一挙に引き受けることになるのだ。

Christmas は Joanna と繋がることを拒否する。神と繋がる祈りも拒否する。まだ McEachern の家にいた頃に、自分が鷲のようになったと感じた Christmas のことを語り手は、“... though he did not then know that, like the eagle, his own flesh as well as space was still cage” (160) と述べる。人生と言う輪の中から外に出ること、肉体という檻から解放されることを求めて走り続ける Christmas にとって、誰かと繋がり自己の存在を確定することは、むしろ枷となってしまふ。逃げ続けている間、肉体の檻の中で時間を気にする彼は、流れていく時に囚われている。そして、時間を知らうとして呼び止めた者や侵入した家の人々は白人であれ黒人であ

れ、彼の外見を見て恐怖におびえる。Christmas が他者と繋がることを拒否する姿勢を、その外見に感じ取ったのであろう。

ところが、Christmas が空腹を感じなくなり、自分の肉体も感じなくなってからのちに馬車に乗せてくれた黒人は、彼を恐れることはなかった。この黒人に出会う前に Christmas は次のように感じている。

It is as though he desires to see his native earth in all its phases for the first or the last time. He had grown to manhood in the country, where like the unswimming sailor his physical shape and his thought had been molded by its compulsions without his learning anything about its actual shape and feel. (338)

水夫は泳げなければ命にかかわるから、有無を言わず泳ぎを実践で教え込まれるであろう。Christmas はアメリカ南部社会に生まれ育ったがゆえに、生きていく上で、外見はまったくの白人だが黒人の血が流れているかもしれないという引き裂かれたアイデンティティーを受け入れざる得なかったのだ。そして続けて次のように感じている。

For some time as he walks steadily on, he thinks that this is what it is—the looking and seeing—which gives him peace and unhaste and quiet, until suddenly the true answer comes to him. He feels dry and light. ‘I dont have to bother about having to eat anymore,’ he thinks. ‘That’s what it is.’ (338)

物語の中で Christmas がものを食べるというモチーフが繰り返して使われているが、食べるという行為は肉体に Christmas を結び付けるものに他ならない。それを気にしなくなったとき、彼は黒人である、白人である、ということから解放されるという暗示かもしれない。だからこそ、Christmas はこの後に会った黒人に恐怖を感じさせなかったのだろう。

だが、この黒人の馬車に乗り、Mottstown に入った Christmas は次のように感じる。

Looking, he can see the smoke low on the sky, beyond an imperceptible corner; he is entering it again, the street which ran for thirty years. . . . ‘But I have never got outside that circle. I have never broken out of the ring of what I have already done

and cannot ever undo'. . . (339)

この一週間、今までの人生よりも遠くへ行けたと感じたとしても、一人の人間として存在する限り、Christmas はこの輪の中から逃げ出せない。生ある限りこの輪の中で宙吊り状態のまま肉体的に存在するしかない。Joanna は自らの仕事を Christmas に譲ろうとした。その仕事の中には、所在を明らかにしなければならない郵便物のやりとりも含められる。人と人とを繋ぐ手紙は、同時に人をこの輪の中に押しとどめる。Christmas は何とか輪の中から逃げ出そうとして、Joanna との繋がりを断ち切ろうとした。しかし生きている限り肉体という枠の中に留まり続けなければならない Christmas には、あたかも Jefferson という目に見えない消印が押されているかのようである。

結び

物語の最後で、メッセージを伝えることを拒否してきた Christmas とメッセージを伝え損ねた Hightower の人生がほんの一瞬重なる。そして、Christmas は無抵抗で Grim に射殺され、Hightower は自分の過去を振り返りながら、夕暮れ時に息を引き取る。Hightower は過去を振り返る中で、妻と若い頃木の祠を利用して手紙をやり取りしていたこと、Jefferson に来るために様々な努力をしたこと、教会員たちに受け入れられず、教会から去らなければならなかったこと、それでも寄付を続けたこと、そしてその後も殉教者のように暮らしていたことなどを思い出し、これはすべて自分が幼い頃に魅せられた“ghost”、祖父にまつわる話しを同じ Jefferson の町で経験するためだと認める。すべてがその一瞬、つまり死の瞬間のために用意されてきたこと、そして、殉教者ではなく、殉教者のふりをしていたことに思いを馳せるのである。祈らなければならないと思いながら、祈る努力をせず、最後の瞬間に祖父が乗っていた馬の蹄のとどろき、叫び声などに身を委ねた Hightower と、祈ることを拒否し続けた Christmas の間で共通していたのは、肉体から解放される瞬間を望んでいた、ということではないだろうか。もしそうであるとするなら、他者とつながることを意味するメッセージのやりとりは、やはり肉体という檻に自らを縛り続ける枷になっているのではないか。*Light in August* の中では、人々は自己を確定することを求めているように見えるが、実はこの物語は、それとは逆のベクトルを生きざるを得なかった人々を描いたものと解釈することが可能である。

Requiem for a Nun の中でも、南北戦争時代の記憶、人馬の疾走する轟きが何度も描き込まれている。これは過去にガラス窓に刻まれたある女性の署名を通して、物語現在の人々に呼び起こされる記憶という設定になっている。*Requiem* の中では、郵便制度にのって届けられるものは厄介を引き起こす場合が多く、郵便制度は連邦を象徴するものとして描かれている。それに対して郵便制度にのらないメッセージは南部における個人としての生のあり方を象徴するものであるという、明確な色分けがあった。³ 郵便はここに至るまでに Faulkner の作品群においてさまざまな現れ方をしているが、この物語ではうごめく人々の生き様に深く郵便その他のメッセージを伝えるものが関わり、郵便（制度）のレトリックによって物語に深みが加えられていく。郵便（制度）は、この物語の逆説的解釈を可能にする文学的意匠として機能していると言えよう。

注

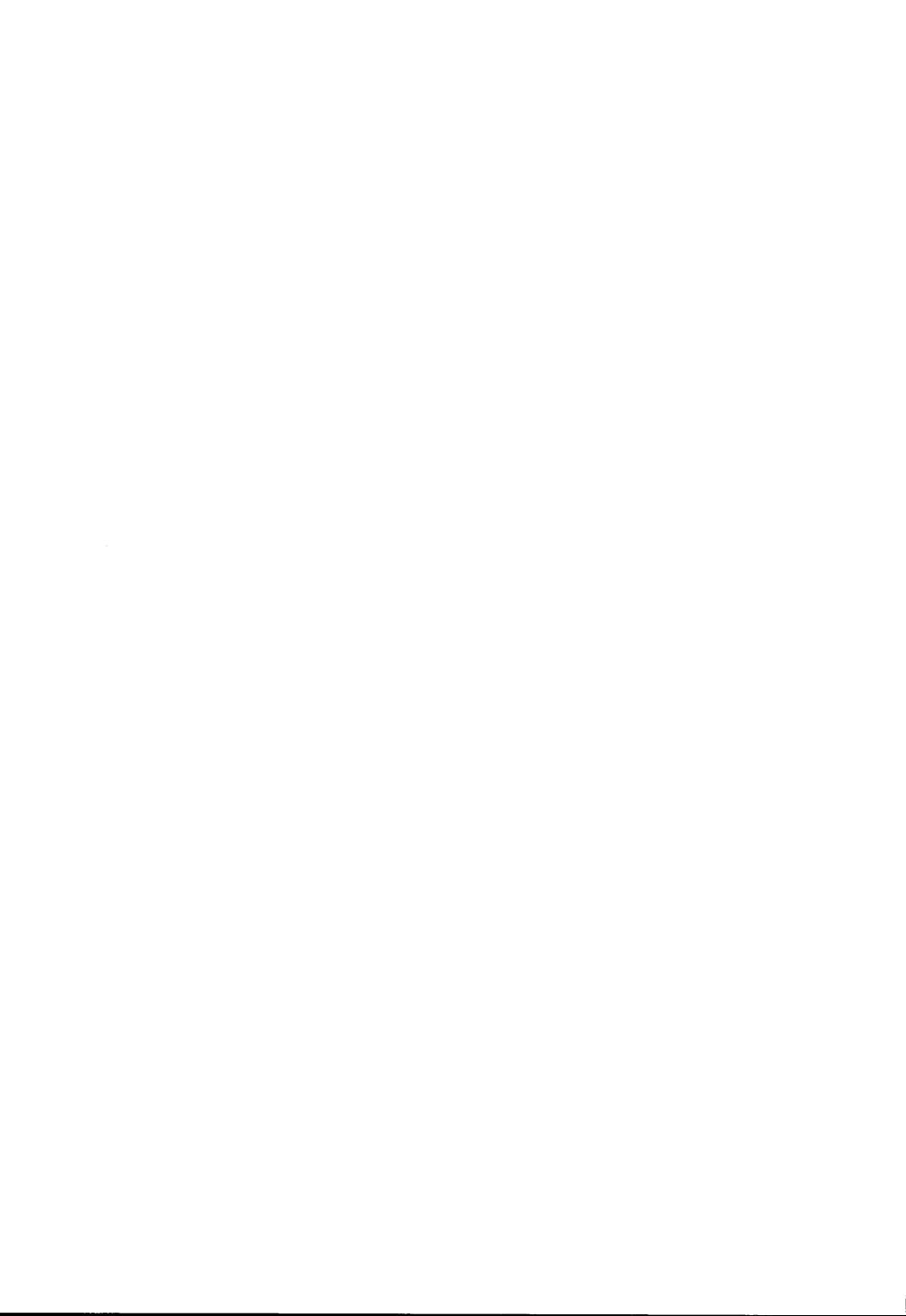
本稿は、日本アメリカ文学会関西支部例会（2005年10月1日 於大阪大学）における発表原稿に加筆訂正を加えたものである。

- 1 詳しくは、*Illustrated Guide to the National Postal Museum* (34-37) を参照されたい。
- 2 ワシントンD.C.の郵便博物館の展示にも、はるかに離れた地域に住む見知らぬ男女が郵便を通して結ばれるという例が展示されている。
- 3 詳しくは文献リストの拙論、「ジェファソン、郵便、フォークナー」（128-156）を参照されたい。

引用・参考文献

- Berland, Alwyn. *Light in August: A Study in Black and White*. New York: Twayne, 1992.
- Bolick, O'keefe Nancy. *Mail Call!: The History of the U.S. Postal Service*. New York: Franklin Watts, 1994.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Heaven: Yale UP, 1963.
- Doyle, H. Don. *Faulkner's County: The Historical Roots of Yoknapatawpha*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001.
- Faulkner, William. *Absalom! Absalom!*. New York: Vintage International, 1990.
- . *Light in August*. New York: Vintage International, 1990.
- . *Soldier's Pay*. New York & London: Liveright, 1997.
- . *The Sound and the Fury*. New York: Vintage Books, 1987.
- Frazier, Charles. *Cold Mountain*. New York: Hodder & Stoughton, 1997.
- Fuller, Wayne E. *The American Mail: Enlarger of the Common Life*. Chicago: U of Chicago P, 1972.
- 平石貴樹 『小説における作者のふるまい—フォークナー的方法の研究』 松柏社, 2003.

- Meriwether, B. James and Millgate, Michael, Eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner*. Lincoln: U of Nebraska P, 1980.
- Moroney, Rita L. *History of the U.S. Postal Service, 1775-1982*. Washington, D.C.: The Service, 1983.
- 沖野泰子. 「ジェファソン, 郵便, フォークナー」『スモールタウン・アメリカ』. 英宝社, 2003.
- . 「Soldier's Pay 考—書簡は語る」『甲南英文学』20. 2005.
- Pitavy, François L. *William Faulkner's Light in August: A critical Casebook*. New York: Garland, 1982.
- Pope, Nancy. *Illustrated Guide to the National Postal Museum*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution, 1998.
- The Postman*. Kevin Costner. Warner Bros, 1997.
- Volpe, Edmond L. *A Reader's Guide to William Faulkner: The Novels*. Syracuse: Syracuse UP, 2003.
- Watson, G. James. *William Faulkner, Letters & Fictions*. Austin: U of Texas P, 1987.



二人のトランセンデンタル・ヒロイン
——ヘスター・プリンとマーガレット・フラ——

水本有紀

SYNOPSIS

In reading *The Scarlet Letter* from the viewpoint of Feminism, Anne Hutchinson and Margaret Fuller come to mind immediately. In this paper, I focus my discussion mainly on the relationship between Hester and Fuller. Hester, outlawed from Puritan society because of her sin of adultery, and Fuller, isolated from New England society by her preeminent intelligence and energy, were able to observe the male-dominated society objectively thanks to their isolation from it. Their ideas about women are similar in that they think it is crucially important in improving the circumstances surrounding women to reform not only society but also women's own consciousness. Above all, their similarity appears clearly in the ending chapters of *The Scarlet Letter* and *Woman in the Nineteenth Century*. Hawthorne indicates Hester and Dimmesdale's marriage in heaven by describing that one tombstone serves for both graves. In a similar manner, Fuller closes *Woman in the Nineteenth Century* with the poem "Sacred Marriage," in which she represents the special nature of the relationship of true lovers in Eden. We can conclude that Hawthorne had Margaret Fuller's ideas about sacred marriage in mind while writing *The Scarlet Letter*.

はじめに

ボストンの古い町並みの一角、オールド・サウス教会の傍に、現在一階フロアは空家になっているが、少し前まで書店と土産物店を兼ねていたオールド・コーナー・ブックストアという店がある。1712年に建てられた建物だが、19世紀初頭にティクナー&フィールズ社が店を構えて以来、アメリカの文学界に多大な影響を及ぼすこととなる由緒ある建物である。ナサニエル・ホーソーン、ラルフ・ウォルドー・エマソン、マーガレット・フラ、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー、ヘンリー・ワズワース・ロングフェローを始めとする当時のそうそうたる面々が出入りをし、超絶主義者たちの集会所ともなっていた。ところで、200年前の17世紀前半、この地所には1637年にボストンを追放されるまでアン・ハッチンソン

が住んでおり、罪を問われることとなる集会を催していた。因縁めいた架空の話
を許されれば、ホーソンとフラーとエマソンが議論に熱中しているその傍で、
200年の時の隔たりを乗り越えてハッチンソンが、そしてさらに現実と虚構の境
界をくぐり抜けてヘスター・プリング、三人の議論に耳を傾けていたかもしれな
い。

1. ヘスター・プリングとアン・ハッチンソンとマーガレット・フラー

Besides, America is now wholly given over to a d—d mob of scribbling women,
and I should have no chance of success while the public taste is occupied with their
trash—and should be ashamed of myself if I did succeed. (17: 304)

女性作家を馬鹿にしたようなこの文面は、出版者ウィリアム・ティクナー宛てに
ホーソンが書いた1855年1月19日付の手紙の一節である。ホーソンはまた、
この手紙とほぼ同じ頃、生前深い親交のあったフラーについて酷評とも言える文
章を書いており、その中でフラーを「大ベテン師」呼ばわりしている。“She [Fuller]
was a great humbug; of course with much talent, and much moral reality, or else she
could not have been so great humbug.”(14: 156) この二つの文章から判断する限り、
ホーソンは露骨なと言ってもよいほどの反フェミニストであったと言いたくな
ってくるのだが、一般に考えられているようにこの一節は売れない作家の妬みと
読むべきであろう。ホーソンは自分の作品よりもはるかに劣る女性作家の「駄
作」が、自分の作品よりも売れる現実に対する憤りを露わにしたのである。

また、ホーソンは17世紀の反律法主義者ハッチンソンを取り上げた「ハッチ
ンソン夫人」という作品を残している。ハッチンソンは植民地時代に反律法主義
を唱え、ピューリタン社会から追放された女性であり、アメリカ最初のフェミニ
ストとも言える人物である。その「ハッチンソン夫人」の中でホーソンは次の
ように述べている。

[. . .]the ink-stained Amazons will expel their rivals by actual pressure, and
petticoats wave triumphant over all the field. Woman's intellect should never give
the tone to that of man; and even her morality is not exactly the strong division-lines
of Nature for arbitrary distinctions.” (23: 67)

ホーゾーンは「女性らしさ」の領域を踏み出したハッチンソンに言及する際、女性作家が内なる声に突き動かされて物を書くことで“a part of the loveliness of her sex” (23: 67) を放棄することになり、女性らしさが喪失されることになってしまいかねないと案じている。

ハッチンソンは植民地時代の男性支配下にあったアメリカ社会に反律法主義という異端の炎を燃え上がらせた人物として名を轟かせた。ハッチンソンのように女性に与えられた領域から出て、男性社会に大胆に挑む女性は、ホーゾーンの目には女性らしさの欠けた不快な存在と映った。とは言いながら、『緋文字』の第一章「獄門」でホーゾーンはそのハッチンソンをバラと結び付けた上で“the sainted Ann Hutchinson”と紹介している。ホーゾーンがある意味でハッチンソンを高く評価していたことの証とも言えよう。『緋文字』に見え隠れするハッチンソンの影を考察する上で見逃してはならない重要なポイントである。

This rose-bush, by a strange chance, has been kept alive in history; but whether it had merely survived out of the stern old wilderness, so long after the fall of the gigantic pines and oaks that originally overshadowed it, —or whether, as there is fair authority for believing, it had sprung up under the footsteps of the sainted Ann Hutchinson, as she entered the prison-door, —we shall not take upon us to determine. (1: 48)

ホーゾーンが『緋文字』の主人公ヘスター・プリンという人物像を創造するにあたって、ハッチンソンを意識していたことは明らかである。物語の設定年代はハッチンソンの生きた17世紀中葉であり、舞台も植民地時代のボストンである。ハッチンソンがヘスターのモデルの一人であったことは多くの批評家が指摘するところであるが、『緋文字』が19世紀に書かれた17世紀の物語であるという事実を目を向け、視点を変えてホーゾーンが『緋文字』を執筆した時代、つまり19世紀に焦点を当ててみると、ヘスターのモデルとしてもう一人の女性の名が浮上する。アメリカ初のフェミニズム指南書として知られる『十九世紀の女性』で男女の平等を謳ったフラである。

因みに2世紀を隔てたこの二人の女性を結び付けるかのような因縁めいた文をホーゾーンは「ハッチンソン夫人」の中に記している。ハッチンソンはロードアイランド植民地でインディアンに襲われ非業の死を遂げたが、その最期に触れた箇所である。“Her [Mrs. Hutchinson’s] last scene is as difficult to be portrayed as a

shipwreck, where the shrieks of the victims die unheard along a desolate sea, and a shapeless mass of agony is all that can be brought home to the imagination.” (23: 73) ここでホーゾーンが比喩として挙げている「難破」で1850年に非業の死を遂げることになるのが、ヘスターのもう一人のモデルであるフラーである。もちろん「ハッチンソン夫人」は1830年の作であるから、『緋文字』執筆後のフラーの死とのつながりはないが、予告とも言えそうな、あまりにも不思議な「偶然の一致」である。

『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアとフラーの類似性は作品の発表直後から現在に至るまでしばしば指摘されているが、『緋文字』のヘスターとフラーの関係については、ごく一部の批評家を除けば、さほど注目されているわけではない。しかし『緋文字』の最終章での女預言者として、また女性のよき相談相手として描写されているヘスターの言動は、ハッチンソンよりもむしろフラーのものに近い。事実、ヘスターにはフラーを思い起こさせる言動が作中随所に見られる。

先行研究では、ハッチンソンとヘスターを結び付けて考察したものは少なからずあるが、フラーとの関係を分析した批評家は決して多くはない。その数少ない中で、トマス・R・ミッチェルは次のように述べている。

I contend that Fuller figured much more deeply in Hawthorne's imagination before and during the writing of *The Scarlet Letter* than anyone has suspected. In all the aforementioned studies, Fuller is cited as the model for the socially and sexually threatening Hester that the narrator of *The Scarlet Letter* condemns. (132-33)

ミッチェルは、ホーゾーンがヘスターという人物像を創造する際、フラーが重要なモデルであったという重要な指摘をしている。

Fuller was at the heart of Hawthorne's very conception of Hester. Through Hester, Hawthorne, on one level at least, continues his now-distant dialogue with Fuller and attempts to represent, if not actually to solve, the riddle of Fuller and their relationship, (133)

さらにマイケル・コラカチオは、特に最終章でのヘスターとハッチンソンとフラーの関係を次のように指摘している。“[. . .] we can already calculate that her [Hester's] final position is, in Hawthorne's mental universe, just about half way between

Ann Hutchinson and Margaret Fuller[. . .]” (468) コラカチオによればハッチンソンの延長線上にヘスターが存在し、そのまた延長線上にフラーが存在することになる。『緋文字』の第一章で獄門をくぐったハッチンソンが、第二章でフラーの面影を漂わせながら、ヘスターの姿となって読者の前に登場するとも言えよるか。

以下、ハッチンソンとの絡みを加味しながらヘスターとフラーの関連を分析する。特に超絶主義そのものとも言えるような考えの持ち主であることからヘスターをエマソンの代弁者と見なす批評家も多くいる事実を考慮に入れ、さらにハッチンソンの反律法主義と超絶主義の意外とも言える共通点をも考察する。

2. マーガレット・フラー

フラーの名著『十九世紀の女性』は、何世紀にも渡って女性が失っていた人間的尊厳を取り戻し、生きることの真の喜びを獲得すべきだと説き、女性の覚醒を促すことを目的とした書である。超絶主義クラブの機関紙『ダイヤル』に載せた評論「一大裁判——男性対男性・女性対女性」を加筆修正したもので、読者は法廷の場に立たされ、一大裁判の審判に参加することになる。人間は男女の別を問わず「存在の法」によって「完全なる人間」になるよう定められているが、さまざまな偏見によってその法を破ってしまった。そんな人間の最大の罪をいかに裁くべきか、とフラーは読者に問いかける。

フラーの女性論の特徴は、「自己信頼」の概念を強調し、「純粹に女らしい女はいない」ように「完全に男らしい男もない」という両性具有的ヴィジョンを提唱したことにある。“Male and female represent the two sides of the great radical dualism. But, in fact, they are perpetually passing into one another. Fluid hardens to solid, solid rushes to fluid. There is no wholly masculine man, no purely feminine woman.”

(*Woman* 62) ある意味で両性を具有する理想的な姿への変身を遂げた男女は“the liberty of law, and the harmony of common growth” (*Woman* 63) の状態に入ると言う。そしてフラーは女性の自立を許さない男性中心の社会を非難する一方で、女性が不当な扱いを受ける理由は、社会の本質にだけでなく女性自身の意識の低さにもあるとし、女性は「自己信頼」を遂げ、内面に目を向け、自分たちの真の本性と力を見出さなければならないと繰り返し主張した。

自己信頼は、エマソンが創出した超絶主義の中核をなす概念である。エマソンは自己の中に神が存在するゆえに、自己を信頼することは、神を信頼することに

なると考えた。人間の無限の可能性を信じたエマソンの自己信頼の概念を、フラーは女性を不当に扱う社会を改革する手段の一つとして自らの女性論の中核に据え、社会変革の立役者となるための条件として、「自己信頼」を遂げ、自らを制御できる女性であることを挙げた。

Those who would reform the world must show that they do not speak in the heat of wild impulse; their lives must be unstained by passionate error; they must be severe lawgivers to themselves. They must be religious students of the divine purpose with regard to man, if they would not confound the fancies of a day with the requisitions of eternal good. Their liberty must be the liberty of law and knowledge. (*Woman* 40)

社会を変革する者は、一時の感情に駆られて発言したり、熱情による過ちに染まっ
ていてはならず、自らが課した法を遵守しなければならないと説いた上で、さら
に最終的にはその次元を超越した「法からの解放」が理想の形であると主張す
る。

ところでフラーはイギリスの女権運動家メアリ・ウルストンクラフトに言及し、
存在そのものが女性の権利の新しい解釈の必要性を証明していると賞讃した。そ
の上で、ウルストンクラフトのように知・情ともに恵まれた女性は、生まれなが
らに「女性らしさ」という狭い領域に自らを閉じ込めることができず、結果とし
て「女性らしさ」の束縛から解き放たれ、法を破ることになってしまい、“outlaw”
にならざるを得ないと述べている。“Such beings as these, rich in genius, of most
tender sympathies, capable of high virtue and a chastened harmony, ought not to find
themselves, by birth, in a place so narrow, that, in breaking bonds, they become outlaws.”
(*Woman* 40) 「無法者」とか「社会からの追放者」と訳される “outlaw”の原義は、
「法の保護を奪われた者」であり、「法の支配の外にある者」である。その意味で
先ほどの “the liberty of law”は「法からの自由・解放」であり、まさしく “the liberty
of law”を享受する者とは “outlaw”に他ならない。

因みにヘスターは、17世紀のピューリタン社会では姦通よりも重い罪であった
に違いないとホーソーン自身が見なしている「自由思想」を身に着けることにな
るのだが、そのヘスターをホーソーンは “outlaw”という言葉を使って描写してい
る。“But Hester Prynne, with a mind of native courage and activity, and for so long a
period not merely estranged, but outlawed, from society, had habituated herself to such
latitude of speculation as was altogether foreign to the clergyman.” (1: 199) さらに、ホ

ーゾーンは “It was an age in which the human intellect, newly emancipated, had taken a more active and a wider range than for many centuries before.” (1: 164) と付け加え、ヘスターが「人知の新しい領域がより活発で広範囲の領域に渡っていた」時代に生きていたことを強調する。ここでいう「人知の新しい領域」とは 17 世紀ヨーロッパでキリスト教に対抗する形で生まれた無神論思想である自由思想などを指すが、ニューイングランドに目を移せば、正統思想としてのピューリタニズムに対抗するという意味でハッチンソンの説いた反律法主義を、また、ホーゾーンの生きた 19 世紀ニューイングランドに焦点を合わせれば、当時支配的となっていたキリスト教（ユニテリアニズム）に対抗する形で生まれた超絶主義をもその範疇に入れてよかろう。

さて、ヘスターの時代ほどではないが、フラーを始め、女性のための社会変革を唱える者に対する 19 世紀アメリカ社会の風当たりは強く、女性にとって自分の信念に従って生きるとは社会からの孤立を意味した。そうした時代にありながら、フラーが飽くまでも自分の信念を貫き通した背景には父ティモシーの影響があった。ティモシーはフラーを男性にも負けない立派な人間に育てようと英才教育を施したが、ティモシー自身、ピューリタン独特の固定観念に抵抗したりリベラルな思想の持ち主であった。こうした影響下に育ったフラーは、教会の介在なしでは楽園へ帰還できないとしたピューリタンの権威主義的な考えを疑問視し、人間の新たな可能性を訴えた超絶主義に傾倒していったのであった。

自分の信念を貫いて生きたフラーの生涯は、40 年という短いものではあったが、実に波乱に満ちていた。因みに、神が宿る心の言葉に従えとする自己信頼の思想は、言い換えれば自らの意志に従えとの教えでもある。人生の終盤でフラーが選んだ選択肢はアメリカ初の女性特派員としてヨーロッパ各地で起こった革命を支援することであったが、フラーの行動はアメリカ社会にとって衝撃的なものであった。ホーゾーンが後年 “her clownish husband” (14: 156) と揶揄することになる 10 歳も年下の革命家であった夫オソリとの結婚、ならびに正式な結婚をしていない段階で産んだ子供の存在を隠してきたフラーであったが、アメリカではフラーに対する非難の嵐が吹き荒れていた。それまでいかなる非難にも耐えてきたフラーも、女性であるが故の葛藤に苦しみ抜いた末、ついに家族と共にアメリカへの帰還を決意したが、ニューヨーク港を目前にして家族もろとも非業の死を遂げる事となった。フラーがイタリアから無事に生還していたとしても、ニューイングランドは、残酷な仕打ちを加えたにちがいない。それは『緋文字』の始めてヘスターがパールを胸に抱き、“free-will” (1: 52) によって監獄から現れた姿を髣髴

させるものであっただろう。

ホーソーンはフラーの死後、知人の彫刻家モウジャからフラーにまつわる醜聞を聞き、フラーを酷評することになったが、ミッチェルの示唆にもある通り、『緋文字』を執筆した時点ではむしろニューイングランドへ帰還するフラーの姿をヘスターに託していたのかもしれない。(130) ホーソーンはフラーがニューイングランドへ子供連れではない別の形で帰還を果たすことを期待していたのではないか、ホーソーンが最終章で描いた女預言者としてヘスターの姿は、実はホーソーンが思い描いた子育てを済ませた後の帰還というフラーの姿ではなかったのか、とさえ考えたくなる。¹

3. ヘスター・プリンとフラー

19世紀の男性作家はフラーのように男性顔負けの弁舌を振るい、誰にも頼ることなく、まさしく「自己信頼」を貫く女性を非難した。ホーソーンも、アメリカ最初期のフェミニストの代表格としてフラーと並び称される義姉のエリザベス・ピーボディに対し、辛辣な態度をとることがあったことから分かるように、フェミニストに喝采を送っていたわけではない。しかし、当時の一般的な男性のようにフェミニストをこき下ろすようなことはしなかった。

『緋文字』の主人公ヘスターは、フェミニストが賞賛せずにはいられない力強い女性である。ホーソーンは、女性らしさに欠けた女性を好んではいなかったが、その反面ヘスターのように閉鎖的で偏見に満ちた社会に疑問の目を向け、自分の信じる道を突き進む力強い女性に興味を持ち、作品のモチーフにした。フェミニズムの視点から見れば、ヘスターが発する“Was existence worth accepting, even to the happiest among them [the whole race of womanhood]?” (1: 165) という疑念は、フラーをはじめとする女権拡張を謳った数多くの女性が、まず最初に心に抱く疑念と重なる点で興味深い。

As a first step, the whole system of society is to be torn down, and built up anew. Then, the very nature of the opposite sex, or its long hereditary habit, which has become like nature, is to be essentially modified, before woman can be allowed to assume what seems a fair and suitable position. Finally, all other difficulties being obviated, woman cannot take advantage of these preliminary reforms, until she herself shall have undergone a still mightier change; in which, perhaps, the ethereal

essence, wherein she has her truest life, will be found to have evaporated. (1: 165-66,
下線は引用者)

特に下線部の「手始めの改革から女性が恩恵を受けるためには、何よりも女性自身が大きな変化を遂げねばならない」というヘスターの考えは、前述のフラの考えとほぼ重なる。フラは何よりも女性自身の意識の改革の必要性を強調した。社会全体が変わるためには、女性が自己を育成し改造することが前提であり、そのためには「自己信頼」を遂げなくてはならない。フラは男女ともに「自己信頼」を発展させることが社会の構造を改善する原動力であると考えた。“I have urged upon the sex self-subsistence in its two forms of self-reliance and self-impulse, because I believe them to be the needed means of the present juncture.” (*Woman* 96)

以上のように、ヘスターの言動はフラのものと同重なる部分が多く、まさしく“*He made them the villains in *The Scarlet Letter* and created in Hester a somewhat Transcendental heroine.*” (*Hawthorne* 14) というワゴナーの指摘の通りである。またさらによく指摘されることではあるが、ヘスターはある意味でエマソンの代弁者と言える。

ヘスターのもっとも超絶主義的な性質が現れるのは、森の中でディムズデルにボストンを脱出しようと誘い、それまで7年間身に付けていた緋文字を初めて捨てる場面である。エマソンによれば、森すなわち自然は「神の植林地」であり、その中に入ると人間は「宇宙と本来あるべき独自の関係」を持つことができる。蛇が脱皮するように人間が年齢の衣を脱いで永遠の子供に帰る空間である森の中で、超絶主義の特徴の一つである「過去の否定」をヘスターは演じてみせる。“‘Let us not look back,’ answered Hester Prynne. ‘The past is gone! Wherefore should we linger upon it now? See! With this symbol, I undo it all, and make it as it had never been!’” (1: 202) ヘスターが過去を否定し、過去および罪の象徴である緋文字を捨てるこの場面は、エマソンの作品中最も有名であり、エマソンの思想の集約とも言える。“In the woods [...] a man casts off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life, is always a child. In the woods, is perpetual youth.” (*Nature* 10) という箇所と重なる。人間が時間を捨て永遠の命を得ることができるとエマソンが言う森で、ヘスターは「蛇が皮を脱ぐ」ように過去と罪を象徴する緋文字を捨てるのである。ところが、そのヘスターは森には緋文字(=時間・罪)を隠す力がないことを悟り、一旦捨てた緋文字を再び胸に着け直す。

キリスト教の考えでは、人間は原罪によって死を免れない存在となった。罪

がもたらした死が意味するものは時間であり、森の場面でヘスターが一旦捨てた緋文字は時間と、その淵源である原罪を意味する。したがって、緋文字を捨てるヘスターの行為は、原罪の否定を象徴することになる。罪と死と時間という三副対を表わす言葉がモータリティであるが、キリスト教ではそのモータリティに支配されている人間は、その不完全性ゆえに信頼できないと見なされる。そのキリスト教思想を支持していたホーゾーンは、ヘスターに一旦緋文字を捨てさせながら、その行為が無駄であることを悟らせることによってモータリティを否定するエマソンの思想を否定するのである。エマソンは、人間がモータリティに支配されていること自体を否定し、人間は完全な存在であると主張した。原罪という過去の罪と、罪によって生み出された時間性を否定し、「完全なる自己」への信頼、すなわち自己信頼の概念を主張したのである。これが、フラーが全幅の信頼を寄せて、その思想をまるごと受け継いだエマソンの自己信頼の思想である。

さて、夜の晒し台でヘスターとパールとディムズデイルが手をつないだ瞬間、“The three formed an electric chain.” (1: 153) とホーゾーンは言っている。さらに、森の中で超絶主義者さながらのヘスターがディムズデイルにボストンを出ようと説得する場面では、“Is the world then so narrow?” exclaimed the Hester Prynne, fixing her deep eyes on the minister’s, and instinctively exercising a magnetic power over a spirit so shattered and subdued, that it could hardly hold itself erect.” (1: 197) と、ホーゾーンは“magnetic power”という言葉を用いている。この“electric”と“magnetic”という二つの言葉もまたヘスターとフラーとの結びつきを考える上で興味深い。なぜなら、この二つの言葉は、フラーが女性に特有の素質として『十九世紀の女性』で用いた言葉なのである。

The electrical, the magnetic element in Woman has not been fairly brought out at any period. Everything might be expected from it; she has far more of it than Man. This is commonly expressed by saying that her intuitions are more rapid and more correct. (55)

フラーは、エマソンが霊の本質だとした女性の直感 “The electrical, the magnetic element” という女性的要素ゆえに男性の直感よりも敏速で正確であると言う。ホーゾーンはもちろんフラーの『十九世紀の女性』を熟読していた。これら二つの単語が 18 世紀後半から 19 世紀前半の科学万能の時代を象徴する流行語であった

という事実はあるが、ホーソーンがこの二つの言葉を重要な意味を持たせて用いる際にフラールの文章を思い浮かべていた可能性はきわめて高いと言える。

さらに、ヘスターとフラールの共通点として、周囲の人々に対する献身的な振る舞いを挙げることができる。恥辱の生活を始めて7年が経ち、ヘスターに対する人々の見方も変わってきた。さまざまな状況から“A”が“Adulteress”の頭文字であることは明らかであるが、ホーソーン自身は“A”が具体的に何を表すかについては明言しない。そうした中で、ホーソーンは、第13章で“The letter was the symbol of her calling.” (1: 161) と述べて、緋文字の象徴性に触れ、死の国へと旅立とうとしている者が時の淵でどこに足を下ろせばよいのか迷ってうっかり地獄へと行きかねない場面で、正しい行き先を指し示す灯火のような役割を果たす緋文字がヘスターの“calling”（天職・召命）の象徴である、とホーソーンは言う。やがて町の住人たちも“A”はもはや本来の意味である“Adulteress”ではなく「有能な者」を表す“Able”の“A”であると噂するようになる。

She was self-ordained a Sister of Mercy; or, we may rather say, the world's heavy hand had so ordained her, when neither the world nor she looked forward to this result. The letter was the symbol of her calling. Such helpfulness was found in her, —so much power to do, and power to sympathize, —that many people refused to interpret the scarlet A by its original signification. They said that it meant Able; so strong was Hester Prynne, with a woman's strength. (1: 161)

ところで、ここに描写されているヘスターの献身的な行動は、革命期の真つ只中であつたイタリアで病人の世話をするフラールの姿を髣髴させる。因みにポストンではフラールのことを“a person on intellectual stilts” (Slater 140) と揶揄していたエメリン・ストーリーは、ローマでフラールと親睦を深めるうちにフラールを“a mild saint and a ministering angel” (Slater 169) と呼ぶようになり、さらにローマでのフラールの様子を次のように描写する。

I have walked with Margaret through the wards, and seen how comforting was her presence to the poor, suffering men. “How long will the Signora stay? When will the Signora come again?” they eagerly asked. For each one's peculiar tastes she had a care; to one she carried books; to another she told the news of the day; and listened to another's oft-repeated tale of wrongs as the best sympathy she could give. They

raised themselves on their elbows to get the last glimpse of her as she was going away. (Slater 169)

フラーが戦時下のローマで病める人々にいかに必要とされていたかがよく分かるが、こうしたフラーの様子はホーソーンの耳にも届いていた。力強い反面、女性らしい優しさで人々を癒すフラーの姿は、『緋文字』で “self-ordained a Sister of Mercy” と称され、“It is our Hester, — the town’s own Hester, — who is so kind to the poor, so helpful to the sick, so comfortable to the afflicted!” (1: 162) と住人の一人に賞賛されたヘスターの姿そのままである。

先に触れたように、フラーの説明によれば、社会を変革する者は、一時の感情で発言したり、熱情による過ちに染まっていたはならない。したがって、フラーの基準からすれば、熱情に駆られて姦通の罪を犯し、胸に “A” の文字を着けることを余儀なくされたヘスターは、社会改革に携わる資格のない女性である。

ここで、『緋文字』で注目したい箇所がある。ヘスターは若い頃は自分が女預言者になるのではないかという空しい希望を抱いていたが、姦通の罪を犯した自分には女預言者になる資格がないと悟る。

The angel and apostle of the coming revelation must be a woman, indeed, but lofty, pure, and beautiful; and wise, moreover, not through dusky grief, but the ethereal medium of joy; and showing how sacred love should make us happy, by the truest test of a life successful to such an end! (1: 263)

ヘスターは「来るべき未来を告げるのは女性」であり、しかもそういった女性は「高尚で、貞淑で、美しく」なければならないと述べるが、これはフラーが社会を改革しようとする者の条件として挙げた「自らに厳しい法を課する女性」という基準と重なる部分である。若い頃のヘスターが男性中心的社会を批判するフラーのフェミニスト像を体現しているとすれば、再びボストンへ戻ってきたヘスターは「自己信頼」を確立しており、その意味では成熟した理想型としてのフェミニスト像を体現していると言えよう。

4. ハッチンソンとエマソン

さて、すでに引用したようにワゴナーはヘスターを “a somewhat Transcendental

heroine”と呼んでいる。この章では、ホーソーン自身がヘスターとの関連性に言及しているハッチンソンと、フラの師であるとともにフラがその思想を丸ごと受け入れたとも言えるエマソンの思想の共通性を検討したい。本稿の冒頭で言及したように、ボストン在住の超絶主義者の集会場の一つに、オールド・コーナー・ブックストアという建物があったが、実はこの建物が建っている敷地はハッチンソンが住んでいた場所である。このオールド・コーナー・ブックストアが超絶主義運動の中心になったことには、反律法主義者ハッチンソンとの運命的な繋がりを感じざるをえない。

17世紀当時、女性の集会が禁止されていたにも関わらず、それを無視し自宅で私的な集会を催し、会合で牧師を中傷し、教会の教えを批判した科で、ハッチンソンは異端の嫌疑をかけられた。神権政体の傾向が強いピューリタン社会のハッチンソンへの弾圧は厳しく、隠微であった。ハッチンソンへの尋問は、1637年11月、極寒のニューイングランド郊外を舞台に、マサチューセッツ湾植民地の総督であり、自分たちピューリタンが作る“City upon a hill”を世界に示す手本にしようと試みたジョン・ウィンスロップを中心に行なわれた。

ハッチンソンへの尋問は、主に、女性であるにもかかわらず繰り返し行なった説教、ピューリタン聖職者に対する批判、そして「恩寵契約」を対象としたものであった。恩寵契約とは、恩寵を受けてさえいれば救われるとする思想で、当時の主流派ピューリタンが奉じていた律法主義と真っ向から対立する思想である。

さらに、尋問の過程でハッチンソンは「直接啓示」を受けたという点で自分はアブラハムと共通していると発言した。その結果、教会等の介在なしで直接神の声を聞いたと見なされ、ハッチンソンは異端として追放されることとなった。

Mr. Nowell. How do you know that that was the spirit?

Mrs. Hutchinson. How did Abraham know that it was God that bid him offer his son, being a breach of the sixth commandment?

Dep. Gov. By an immediate voice.

Mrs. H. So to me by an immediate revelation.

Dep. Gov. How! An immediate revelation.

Mrs. H. By the voice of his own spirit to my soul[. . .]. (Hall 337)

教会員、すなわち「見える聖徒」になるためには、神からの恩寵を受けたという回心体験を教会で語ることによって神との間の「恩寵契約」を証明することが条

件とされた。当時のピューリタン主流派は、救いの証拠としてこの恩寵を授かるだけではなく、よき業を積むことをも挙げるようになっていた。その主流派に対して、ハッチンソンは異を唱え、恩寵に与かることが救済への道だと主張して譲らなかった。

17世紀のピューリタンにとって、神の意志は聖書の読書と教会を通してのみ伝えられるものであった。ハッチンソンが罪に問われたのは、教会を通すことなく直接神の声を聞いた (“an immediate revelation”) と主張した点であった。ここでエマソンの「先祖は神と自然を間近に見ていた」という言葉を思い出したい。

Our age is retrospective. It builds the sepulchres of the fathers. It writes biographies, histories, and criticism. The foregoing generations beheld God and nature face to face; we, through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? Why should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs? (*Nature* 7)

ハッチンソンの言う「直接啓示」はエマソンの言う「われわれに直接啓示された宗教」でもある。つまり、エマソンのこの言葉は、ハッチンソンの直接啓示と同様に、17世紀のピューリタンにとっては異端であり「われわれの社会にふさわしくない」ものとされたはずのものである。

さらにエマソンは次のように言っている。

O my brothers, God exists. There is a soul at the centre of nature, and over the will of every man, so that none of us can wrong the universe. It has so infused its strong enchantment into nature, that we prosper when we accept its advice, and when we struggle to wound its creatures, our hands are glued to our sides, or they beat our own breasts. The whole course of things goes to teach us faith. We need only obey. There is guidance for each of us, and by lowly listening we shall hear the right word. (*Essays* 181)

この主張は、ハッチンソンの “By the voice of his own spirit to my soul[. . .]” 「私の魂に神の聖霊が直接語りかけてきた」という証言に酷似している。ハッチンソンは律法を守るのではなく、聖霊による経験こそが真の信仰を意味すると主張した。ハッチンソンは、神は聖職者を通してだけでなく、直接各個人に語りかける

のだと主張した。エマソンもハッチンソンも、個人の魂と聖霊との直接的な繋がりを強調している。さらに、直接啓示と自己信頼の思想には、「個」対「教会」、「個」対「社会」という対立の構図が存在する。個を尊重し、自分は神から直接啓示を受けているため、真の牧師か否かをさえも見分けられると断言してはばからなかったハッチンソンは、ピューリタンにとって、植民地社会の秩序を乱す悪魔的な存在であった。また、ピューリタンが救済は教会の介在なしでもたらされることはありえないと説教する根拠として人間の不完全性を強調したのに対し、ハッチンソンの反律法主義もエマソンの超絶主義も同様に人間の可能性を主張した。

エマソンの「自己信頼」に、反律法主義との類似性を示す次のような興味深い箇所がある。“No law can be sacred to me but that of my nature. Good and bad are but names very readily transferable to that or this; the only right is what is after my constitution, the only wrong what is against it.” (*Essays I* 30) 「わたしにとっては、わたしの本性の法則以外に、どんな法則も神聖ではありえない」 「正しいものはただひとつ、わたしの性質に従っているものだけであり、不正なものはただひとつ、わたしの性質にさかっているものだけだ」とエマソンは言う。

エマソンの超絶主義の中心概念である自己信頼は、“Thou art the law”, “Thou art unto thyself a law, / And since the soul of things is in thee, / Thou needest nothing out of thee.” (*Journals 2* 397) というエマソンの言葉に集約されている。端的に言えば、神がその中に存在する魂を信頼することがエマソンの言う自己信頼であり、「直接啓示」を主張するハッチンソンの思想と軌を一にする。

恐れ多き唯一神エホバを信仰する 17 世紀のピューリタンにとって、万物の創造主を「霊」と呼び、その霊が万人の中に存在すると説いたエマソンは異端者に他ならなかったに違いない。しかし、ピューリタニズムの「人間は罪人である」とする考えから次第に距離を置くようになっていた 19 世紀の人々にとって、人間は地上に墮ちた天使であり、この世に存在する悪は善が欠如した状態なのだとするエマソンの思想は、暗闇に射し込む一筋の光のように人々の心を照らした。同様に個人の魂と聖霊との繋がりを強調して、教会の介在なしで人は救済への道を歩むことができると説いたハッチンソンもまた、ピューリタンの厳格な律法主義に縛られていた 17 世紀ニューイングランドの人々の心を掴んだ。エマソンがハッチンソンの生きた 17 世紀に生きていれば、宗教裁判にかけられ、ニューイングランド追放というハッチンソンと同じ運命を歩んだに違いない。さらに言うならば、エマソンを師事したフラも時代が違えば第二のハッチンソンになったことであろう。

ところで、先に見た “No law can be sacred to me but that of my nature.” というエマソンの文は “The world’s law was no law for her [Hester’s] mind” (1: 164) と “Little accustomed [. . .] to measure her ideas of right and wrong by any standard external to herself, [. . .]” (1: 159) というヘスターを描くホーソーンの表現を思い起こさせる。ミリセント・パールは「ヘスター・プリンの預言」でこの箇所を捉えて、“When Hester, in her lonely solitude following her condemnation, comes to the point of casting away the ‘fragments of a broken chain,’ believing that ‘the world’s law was no law for her mind,’ she seems to echo Hutchinson’s feminine self-reliance.”と指摘し、ヘスターが「ハッチンソンの女性としての自己信頼」を受け継いでいると、ヘスターとハッチンソン、さらにはヘスターとフラーの関連性を考察している。世間の法は法ではなく、自らの内に在る基準に照らして善悪の判断をするヘスターは、まさしく「直接啓示」を主張するハッチンソンと「自己信頼」を主張するエマソンならびにフラーと同一の次元に位置している。

フラーは、社会を変革しようとする者は自らに厳しい法を課す者でなければならないと説く一方で、そうした人物にとっての究極的な自由は「法からの自由」であるとして法を守らなければならない義務を超越しているとも説いていた。この法からの自由というフラーの考えは、真のキリスト教徒は神から恩寵を受けており、律法を守らなくてはならない次元を超えているので律法を守る必要はない、としたハッチンソンの反律法主義と通じる考え方でもある。ホーソーンがハッチンソンの反律法主義に言及しているわけではないが、反律法主義とパールの描写に興味深い共通点があるので、考察してみよう。

The child could not be made amenable to rules. In giving her existence, a great law had been broken; and the result was a being, whose elements were perhaps beautiful and brilliant, but all in disorder; or with an order peculiar to themselves amidst which the point of variety and arrangement was difficult or impossible to be discovered. (1: 91)

生を授かったこの世で暮らすよりも楽園で天使の遊び相手になるのが相応しいパールの特質を挙げるにあたり、ホーソーンはパールが生まれる前に「大いなる法がすでに破られていた」と述べている。

さらに、パールと反律法主義との関連性は、第十章「医者と患者」でチリングワースとディムズデイルの次の会話にも見られる。気ままに墓の間を飛び回り、

そこに生えていた罪を表すオナモミから “burrs” (1: 134) を集め、それをヘスターの “A” の文字に沿って並べていたパールを見ながら、チリングワースは “There is no law, nor reverence for authority, no regard for human ordinances or opinions, right or wrong, mixed up with that child’s composition, [. . .]” (1: 134) と言う。そして、“Hath she any discoverable principle of being?” (1: 134) とチリングワースに問かれたディムズデイルは “None, —save the freedom of a broken law, [. . .]” (1: 134) と答えている。つまり、パールがこの世に生を受ける前に法が破られ、それによってパールは自由を得たのだとディムズデイルは言う。この「大いなる法」は神の律法とも読めるし、宇宙を統べる法（測）とも読めるが、いずれにしろ、パールは「法」を超越した存在なのである。この意味でパールは反律法主義者が言う「律法に支配されなければならない次元を超えた存在」であると言える。そしてこの “the freedom of a broken law” は、フラーが「社会を改革しようとする者」であるための前提として挙げた “the liberty of law” にも通じる。さらに興味深いことにホーソンは “Pearl” という語は、ギリシャ語の “Margaret” を意味すると述べている—— “Pearl—the English of Margaret” (8: 242)。こうしてハッチンソンとパールとフラーが一本の糸で結ばれるのである。

5. 結び

17世紀のピューリタン社会で姦通の罪を犯したが故に孤立したヘスターと、その2世紀後の世俗化したとはいえ同じく未だピューリタニズムの影響下にあったニューイングランドの社会で、その類いない知性と行動力のために孤立していたフラーは、孤立ゆえに社会を、特にその社会における女性の立場を客観的に見ることができた。ヘスターが17世紀に生きた女性であると設定されていることを考えれば、自由思想を身に着けたヘスターの「社会を変革しなければ女性には真の幸せは訪れない」という考え方は、ヘスターとフラーの間に2世紀もの時間の隔りがあることが不思議にさえ思えてくるほど革新的なものであった。

フラーは『十九世紀の女性』で強い口調で次のように語っている。

Women of my country! [. . .]. Women who share the nature of Mrs. Hutchinson, Lady Russell, and the mothers of our own revolution: have you nothing to do with this? You see the men, how they are willing to sell shamelessly, the happiness of countless generations of fellow-creatures, the honor of their country, and their immortal souls,

for a money market and political power. Do you not feel within you that which can reprove them, which can check, which can convince them? You would not speak in vain; whether each in her own home, or banded in unison. (91)

不平等な男女関係の上に成り立った男性優位の社会の欠点を非難しながら、「ハッチンソンの特質を受け継いだ」アメリカの女性に向けて、男性と女性が協調して生きることによってこの世は住みよい場所になる、そのことを女性自身が自覚せよ、とフラーは訴える。男性は社会で活躍してきたが、その優位な権力を誤用してきた。女性が男性にとっていかに重要な存在であるかを女性たち自身が男性に訴えなければならぬ。

ハッチンソン、ヘスター、フラーの三人に共通する点は、ヘスターは言葉少なに、ハッチンソンとフラーは能弁をふるって、強い信念の下に男性優位の社会に楔を打ち込んだことである。フラーは『十九世紀の女性』の中で古今東西の神話や文学を引きながら、女性が男性と肩を並べて胸を張って生きている社会がキリスト教社会以外には存在していることを例証した。それは教会の権威的な道徳律を非難したフラーの超絶主義者たる所以であったが、ハッチンソンとヘスターが教会という一種の男性社会に対抗し、その結果孤立した点と重なる。ハッチンソンが「女性らしさ」という覆いを脱出しようとする時に出来た綻びを、ヘスターが得意の裁縫の技で繕い、最後にフラーが仕上げた。そしていずれも、社会が担わせようとした「女性らしさ」という役割を拒否し、新たな「女性らしさ」の解釈を生み出そうとした。各々の思想や立場は異なるにしても、三人の女性が抱き、それに従って生きた信条はフラーの “What woman needs is not as a woman to act or rule, but as a nature to grow, as an intellect to discern, as a soul to live freely and unimpeded, to unfold such powers as were given her when we left our common home.” (Woman 16) という言葉に集約されるにちがいない。

『緋文字』第13章「ヘスターの別の見方」の中でヘスターは女性の幸せとは何かと自問自答しているが、その疑問はハッチンソンとフラーにも共通していた。ヘスターは、男性と平等の権利を持たないことに疑問を抱き始めて自分の置かれている状況を嘆き、途方に暮れる女性の相談相手になり、「堅い信念」をもって次のような言葉をかける。

She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time, a new truth would be

revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. (1: 263)

この世が天国の時代を迎える準備が整えば、男女の関係はお互いの幸福というより確かな礎に築かれるであろうとヘスターは言っているのだが、この箇所はフラ―が『十九世紀の女性』の締めくくりとして付録に載せている「聖なる結婚」と題した詩と照らし合わせるとまことに興味深い。フラ―は、聖書の一粒の麦の喩えを思い起こさせる種のメタファーを用いて、男女の理想的な結びつきを描写する。フラ―はハイドンの『天地創造』に触れ、そこに描かれているアダムとイヴの楽園における汚れなき結びつきを、男女の理想的な姿と捉え、“marriage in Eden” (124) と名付けた。その “marriage in Eden” はやがて再び来る楽園で “The Sacred Marriage” として開花すべく “the seed of the future growth” をこの世に落とした。その詩をフラ―は次のように結んでいる。

[. . .] With child-like intellect discerning love,
And mutual action energizing love,
In myriad forms affiliating love.

A world whose seasons bloom from pole to pole,
A force which knows both starting-point and goal,
A Home in Heaven,—the Union in the Soul. (*Woman* 125)

ヘスターの言う “Heaven” とは、まさにフラ―の言う “Heaven” である。またフラ―はこの「聖なる結婚」の中で “mutual” という語を用いて、男女が平等な立場で互いを崇拜し尊重し合う夫婦関係を描いているが、これがフラ―が理想とする夫婦関係である。ヘスターもフラ―も理想的な男女のあり方を “mutual” というキーワードで説明していることはきわめて重要な点である。さらにこの “The Sacred Marriage” は、ヘスターが女性たちに語った幸福の源としての “sacred love” でもある。

さらに、『緋文字』の最終章では、“It [a new grave] was near that old and sunken grave, yet with a space between, as if the dust of the two sleepers had no right to mingle. Yet one tombstone served for both.” (1: 264) という描写を通して、現世では交わることを許されていないヘスターとディムズデイルのものと思われる二つの墓の間に、二つの墓を結び付けるかのように一つの墓石が置かれていることを述べて、

ホーソーンは“mutual love”による来世での二人の結びつきを暗示する。これは、まさに『十九世紀の女性』の最後でフラーが述べている“marriage in Eden”である。

さらにホーソーンは『緋文字』の「結び」でヘスターが最終的に到達した心境、あるいは預言を次のように描いている。

She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. Earlier in life, Hester had vainly imagined that she herself might be the destined prophetess, but had long since recognized the impossibility that any mission of divine and mysterious truth should be confided to a woman stained with sin, bowed down with shame, or even burdened with a life-long sorrow. The angel and apostle of the coming revelation must be a woman, indeed, but lofty, pure, and beautiful; and wise, moreover, not through dusky grief, but the ethereal medium of joy; and showing how sacred love should make us happy, by the truest test of a life successful to such an end! (1: 263)

これは『十九世紀の女性』におけるフラーの主張の要約そのものである。最終章でのヘスターとディムズデイルの来世での結びつきの暗示でしめくくるホーソーンの仕掛けは、まさしく『十九世紀の女性』の付録を「聖なる結婚」と題した詩でエデンでの聖なる結婚を描いてしめくくるフラーの手法そのままである。以上の考察からも明らかな通り、ホーソーンの『緋文字』はフラーの『十九世紀の女性』なくしては書かれることのなかった作品である。

注

- 1 手記によれば、モウジャからフラーについての醜聞を聞いた後、ホーソーンはフラーの死に対して、憐憫の情というよりは、自分が描いていたイメージとは違うフラーの姿に失望感を露わにしている。

Thus there appears to have been a total collapse in poor Margaret, morally and intellectually; and tragic as her catastrophe was, Providence was, after all, kind in putting her, and her clownish husband, and their child, on board that fated ship. There never was such a tragedy as her whole story; the sadder and sterner, because she could bear anything better than to be ridiculous. (14: 156)

モウジャはフラアの夫オソリを“Margaret’s servant”、“half an idiot” (14: 155) だときき下ろしたばかりか、オソリのような知性に欠けた男性をフラアが結婚相手として選んだのは、ただの肉体的快楽からのものだったのかもかもしれないとさえ言った。それは、理想的な結婚の形を男女の精神的な繋がりに求めていたフラアにとっては聞くに堪えない中傷だったにちがいない。

引証文献

- Baym, Nina. *The Scarlet Letter: A Reading*. Boston: Twayne, 1986.
- Bell, Millicent. “The Prophecy of Hester Prynne.” <http://www.nytimes.com/books/00/06/11/bookend/bookend.html>
- Bloom, Harold, ed. *Hester Prynne*. New York: Chelsea, 1990.
- Colacurcio, Michael J. “Footsteps of Ann Hutchinson: The Context of *The Scarlet Letter*.” *ELH* 39 (1972): 459-94.
- Emerson, Ralph Waldo. *Journals of Ralph Waldo Emerson*, II, ed. Edward Waldo Emerson and Waldo Emerson Forbes. Boston: Houghton Mifflin, 1914.
- . *Nature, Addresses and Lectures*. Ed. Alfred R. Ferguson et al. Cambridge: Belknap-Harvard UP, 1971.
- . *Essays: First Series*. Ed. Alfred R. Ferguson et al. Cambridge: Belknap-Harvard UP, 1979.
- Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century*. Mineola: Dover, 1999.
- . *The Letters of Margaret Fuller*. Ed. Robert N. Hudspeth. Vol. 5. Ithaca: Cornell UP, 1988.
- Hall, David D., ed. *The Antinomian Controversy, 1636-1638*. Durham: Duke UP, 1990.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Milliam Charvat et al. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Mitchell, Thomas R. *Hawthorne’s Fuller Mystery*. Amherst: U of Massachusetts P, 1998.
- Slater, Abby. *In Search of Margaret Fuller: A Biography*. New York: Delacorte, 1978.
- Urbanski, Marie Mitchell Olesen. *Margaret Fuller’s Woman in the Nineteenth Century: A Literary Study of Form and Content, of Sources and Influence*. Westport: Greenwood, 1980.
- Waggoner, Hyatt H. *Hawthorne: A Critical Study*. Rev. ed. Cambridge: Belknap-Harvard UP, 1963.
- Zwarg, Christina. *Feminist Conversations: Fuller, Emerson, and the Play of Reading*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- 青山義孝『ホーソー研究——時間と空間と終末論的想像力——』英宝社, 1991.
- 荒このみ編『史料で読むアメリカ文化史2——独立から南北戦争まで 1770年代—1850年代』東京大学出版会, 2005.
- 遠藤泰生編『史料で読むアメリカ文化史1——植民地時代 15世紀末—1770年代』東京大学出版会, 2005.
- 川窪敬資編『ホーソーの軌跡——生誕二百年記念論集——』開文社出版, 2005.
- 進藤鈴子『アメリカ大衆小説の誕生——1850年代の女性作家たち——』彩流社, 2001.
- 吉田とよ子『エマソンと三人の魔女』勉誠出版, 2004.



SYNOPSIS

This paper presents a comprehensive account of donkey sentences in the form *either...or...construction* by proposing a radically modified version of the “Re-projection” approach, whose account is originally based on the framework of Hornstein&Uriagereka (2002). At the core of this paper’s account lies in the assumption that LF behavior of Quantifier Raising is in fact derived by three types of overt operations

(1) the **Late Adjunction** of *either or*, (2) Coordinate Structure Formation driven by the **Parallelism Requirement**, (3) Overt **Re-projection** approach). As a result, by resorting to three operations, we can account for the fact that donkey anaphora in *either-or* forms includes and the indirect binding relations between the antecedent (*a donkey*) and the weak pronoun (*it*) and the interaction of *either*’s focus pattern and varieties of *or* scope. Moreover, we can capture the Chomsky’s (2005a,b)remarks that computations of languages should be reduced to a single cyclic derivation without S-structure and LF component. Finally, we explore the possibility for permitting a unified account of other types of constructions such as the *neither...nor...* and the *both...and...* construction.

0. 序

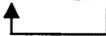
本稿では主に(1)の *either...or...*型の構文(*either-or* 構文)でなぜ名詞と代名詞の間で同一指標付与される束縛関係が、間接束縛という形で成立するのかを考察し適切な派生過程を展開する。

(1) *Either* John doesn’t own a donkey *or* he keeps it very quiet. (Heim 1990:173)

まず第一節では *either-or* 構文の分析方法として主張(I)~(III)に分類されることを概観する。

[主張(I): 移動、削除分析(Larson(1985)、Schwarz(1999))]

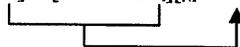
(2) a. Jane *either*_i ate [DP *t*_i [DP rice] *or* [DP beans]]. (Larson 1985:254)



b. [_{IP} *Either* [_{IP} Jane ate rice] *or* [_{IP} ~~she~~ ate beans]]. (Schwarz 1999:351)

[主張(II): 右方接点繰上げ分析(Han&Romero(2004))]

(3) Mary *either* [_{VP} bought *e*_i] *or* [borrowed *e*_i][_{NF} the book]_i. (Han&Romero 2004:561)



[主張(Ⅲ) : 焦点化不変化詞分析(Hendriks(2001)、Johannessen(2005))]

(4) a. John **only** introduced Bill to SUE.

b. John **either** introduced Bill to SUE or MARY. (Hendriks 2001:8)

第 1 節では主張(Ⅰ)~(Ⅲ)は(1)にみられるロバ文の間接束縛を十分に説明できないことを指摘する。次に第 2 節で再投射分析(re-projection)を修正し、具体的に 3 節では(5)を(1)に適用する。

(5) a. 接続詞(or)の移動により対句形成要求(Parallelism Requirement)が満たされる。

b. 付加詞 **either** の後発付加(Late Adjunction)により焦点化解釈の範囲が決定される。

c. 数量詞句 **either** の顕在的再投射(Overt re-projection)適用により間接束縛が成立する。

第 4 節ではさらに **neither...nor...**構文(neither-nor 構文)、**both...and...**構文(both-and 構文)の適切な派生過程を提示することで本分析のさらなる一般化を図る。第 5 節は本稿のまとめである。

1. **either-or** 構文をめぐる

1.1. ロバ文における間接束縛

はじめに関係節型のロバ文との比較を通じて **either-or** 構文のロバ文の束縛関係について考える。

(6) *Either* John doesn't own a donkey_i or he keeps it_i very quiet. (Heim 1990:173)

(7) a. Every farmer who owns a donkey beats it, and the priest does, too.

b. farmer who owns a donkey beats **the donkey he owns**, and the priest does, too.

(6)では名詞(a donkey)と代名詞(it)は同一指標付けされるが外見上 c-統御関係がないにもかかわらず it が束縛代名詞として解釈される。だがここで注意すべき点はこのような同一指標付与は義務的ではない点である。その証拠として(7b)の E 型代名詞の解釈(皆が所有するロバ)は義務的だが(7a)における E 型代名詞の解釈は随意的である。この要因は Häik(1984)のロバ文には(8)の間接束縛(indirect binding)の関係が成立し、it の解釈として Leu(2005)の(9)が考えられるからである。

(8) 間接束縛(indirect binding): NP_i → NP_{i(j)} iff NP_i has scope over NP_j. (Häik 1984:203)

(9) a. [Every [_{s_b} farmer who owns a donkey]][_{s_e} beats it]].

b. Informational truth conditions: *for every x, s_b such that a is a farmer who owns a donkey in s_b, there is an extended situation of s_b, s_e, in which x beats in s an entity in s_e which is unique in its minimal situation.* (Leu 2005:5)

Häik に従うと、(8)の構造で a donkey が QP(every man)を仲介とし、間接的束縛子として機能するため代名詞(it)をc統御し NP_{ip}と解釈する。¹ つまり a donkey は every farmer を仲介として it を間接的に束縛することを意味する。この考えと Leu の提示する(9a)の情報真偽条件(9b)に照合すると代名詞 it は文の範囲から拡張された状況下の実在物(entity)に過ぎず、直接的束縛関係は成立しないことになる。しかし(8)と(9)の分析だけでは間接束縛が成立しない(10b)までも網羅できない。

(10) a. {Every professor and his spouse/*his spouse and every professor} attended the convocation.

b. *Everyone who owns a donkey_i came, and Mary bought it_i.

((10a) Citko 2005:483, (10b) Boeckx 2003:214)

(10a)のような等位構造には通常c統御関係が成立するが、(10b)では a donkey と代名詞(it)との間に束縛関係が成立しない。この事実は a donkey より広作用域を持つ数量詞句(everyone)が存在しても and 以下の節の代名詞を c 統御できず、また(6)でも束縛関係は成立しないことが予測される。

次節では either-or 構文をめぐる先行研究を概観し、間接束縛が成立する構造を検証したい。

1.2.1 移動か削除か—Larson(1985), Shwarz(1999)

まず either-or 構文と等位構造とを関連付けた Larson(1985)と Shwarz(1999)を概観する。

(11) a. *Either Jane ate rice or she ate beans.*

b. *Jane either ate rice or beans.*

(den Dikken 2004:1)

(12) *Mary either stole or dropped the apples that Sue did.* (Larson 1985:257)

(11a)は接続詞(or)により2つのIPを等位接続し、(11b)は動詞と名詞を接続している。また(12)では動詞の束縛関係が成立している。Larson は(11)と(12)を説明するべく(13)と(14)を提示している。

(13) a. [_{IP} either_i [_{IP} Jane [_{VP} t_i ate rice] or [_{VP} ate beans]].



b. *Jane either_i ate [_{DP} t_i [_{DP} rice] or [_{DP} beans]].*

(Larson 1985: 254)



(14) [_{IP} Mary [_{rinfl}-either_i [_{VP} [_v stole [_{Comp} e_i or] dropped]] [_{NP} the apples [_{CP} that Sue did.]]]]



(13a)では either は IP 節、(13b)では名詞と動詞を接続する位置に生成しているが、等位構造形成を前提として数量詞の副詞である either による(13a)、(13b)の移動分

析を採用し、解釈の曖昧性を捉えている。また Larson は(12)に対し LF 構造(14)を提示し、動詞を修飾する数量詞副詞 *either* が数量詞繰り上げ適用によって関係節内の *did* を束縛するため同一指標付与される主張している。

次に Larson の移動分析でなく、等位構造上の削除分析を採用した Schwarz(1999)を概観する。

(15) a. Jane *either*_i [_{VP} ate rice] or [_{ate} [_{DP} beans]].

b. [_{IP} *Either* [_{IP} Jane ate rice] or [_{IP} she-ate beans]]. (Schwarz 1999:351)

(16) a. ??*Either* this pissed Bill or Sue off.

b. *Either* [_{IP} this pissed Bill off] or [_{IP} this pissed Sue off]. (Schwarz 1999:352)

Schwarz の分析も等位構造を形成することが核にあるが、Larson と異なる点として *either* は移動するのではなく基底生成していると考え、(15a-b)の構造では等位節の右端の共通部分を削除する分析を採用している。ゆえに(16a)の文法性に問題が見られるのは(16a)の構造(16b)が示すように削除される要素である不変化詞(*off*)は右端に生起せず、削除方法として並行的でないからである。

だが、ここで両分析が説明できない問題点を指摘したい。Larson の移動分析では *either* は自由に移動するため削除の並行性を意識しないため(16a)を誤って文法的だと予測し、逆に Schwarz の削除分析は *either* の移動を仮定していないためどのような派生過程を経て(14)の束縛関係が成立するのかを説明ないという問題が生じる。² さらに、Larson と Schwarz の両分析にも考えられる問題点として、Johannessen(2005)の提示する(17)の語順の事実を説明できないことがあげられよう。

(17) a. Yet, [_{CompP} [our invitation was *either* a complete hoax [...]] or [else we had good reason to think that important issues might hang upon our journey]].

b. [Enten bærer den mat til fuglene], eller [den bærer snø].

either carries it food to the-birds or it carries snow.

‘*Either* it carries food to the birds or it carries snow.’ (Johannessen 2005:439)

Johannessen は、(17a)の第1節と第2節とでは完全に独立しており、また V2 言語であるノルウェー語の(17b)では第1節内に *enten*(=*either*)が埋め込まれ、さらに V-2 倒置により語順が異なっていることから実際には *either-or* 構文では等位構造は形成されていないと主張している。この主張が正しければ Larson の移動分析と Schwarz の削除分析という操作だけでは(17)の事実を説明できない。

1.2.2 右節点繰り上げ分析—Han & Romero(2004)

次に Han & Romero(2004)を概観する。Han & Romero は *either-or* 構文にみられる

解釈の曖昧性を説明するために、Shwarz(1999)に類似した削除分析と、等位節の右端の共通部分をまとめて文末に配置する右節点繰り上げ(Right Node Raising、以下 RNR 分析)を同時に適用している。³

(18) Did Mary buy *or* borrow the book?

a. *yes-no-question*: Op_i Did Mary buy *or* borrow the book?

b. *alt-question*: Did Mary [$_{VP}$ buy e_i *or* borrow e_i] [$_{NP}$ the book] $_i$?

(Han & Romero 2004:561)

(19) Mary *either* bought *or* borrowed the book.

a. Mary *either* [$_{VP}$ bought *or* borrowed] the book.

b. Mary *either* [$_{VP}$ bought e_i]*or* [borrowed e_i] $_{NP}$ the book] $_i$. (Han & Romero 2004:561)

疑問文(18)には yes/no を問う答えと代案を問う答え(alternative answer)とがあり曖昧である。また彼らは either-or 構文(19)に or が焦点化される(19a)とされない場合とで解釈が曖昧なのは(19b)のように名詞の RNR が適用される派生があるからだと主張している。だが分析の問題点を指摘したい。

(20) a. [$_{IP}$ Mary *either* [$_{VP}$ stole *or* dropped]] [$_{NP}$ the apples [$_{CP}$ that Sue did, [$_{VP}$ stole *or* dropped]]

b. [$_{IP}$ *Either* John doesn't [$_{VP}$ own a donkey]] *or* he keeps it, [$_{NP}$ the donkey (owned by John)]

Han & Romero 分析は 1.2.1 で概観した Schwarz の分析と同様に either の移動分析を採用していないため RNR 分析を等位節の右端の共通部分に対して非顕在的に適用したとしても(20a)の did は先行する動詞(stole or dropped)、(20b)もまた先行する名詞(the donkey owned by John)でなければならず Heim(1982)の非選択的束縛にのみが成立し、1.1 で概観した間接束縛とは性質が異なる。⁴ さらにこの分析も等位構造形成が核にあるため Johnnessen(2005)の(17)の事実を説明できない。

1.2.3 焦点化と数量詞繰り上げ-Hendriks(2002)、den Dikken(2004)

次に、either-or 構文の either は数量詞でも基底生成する副詞でもなく、焦点化不変化詞(focus particle)であると主張する Hendriks(2001)を概観する。Hendriks の提示する(21)と(22)を見よう。

(21) a. John **only** introduced Bill to SUE.

b. John **only** introduced BILL to Sue.

(Hendriks 2001:8)

(22) a. John **either** introduced Bill to SUE *or* MARY.

b. John **either** introduced BILL to Sue *or* MARY.

(Hendriks 2001:8)

(21a)で焦点不変化詞(only)により Sue を焦点化することで only は「John が Bill を紹介した人」の中に「Sue」が加えられること、(21b)で Bill を焦点化することで「John が Sue に紹介した人」は「Bill」に限定されることを意味する。同様に焦

分析は(14)の間接束縛を説明できるか曖昧だという問題が残る。

1.3 まとめ—either-or 構文分析のあるべき姿

1.1と1.2.1~1.2.3でeither-or構文をめぐる先行研究を検証し各分析の問題点を指摘してきたが、Larson(1985)の移動分析、Schwarz(1999)の削除分析ではJohnnessen(2005)が指摘するようにV2言語などの語順の相違を説明できず、Han & Romero(2004)のRNR分析では間接束縛と語順の相違を説明できない。またden Dikken(2004)が指摘するようにHendriks(2001)のeitherの焦点不変化詞分析には問題がある。先行研究の網羅点と問題点を要約したものとして(27)を提示する。

(27) either-or 構文をめぐる先行研究とその網羅点

| | 等位構造 | 間接束縛 | 焦点化 |
|--------------------|------|------|-----|
| Häik(1984) | ✓ | * | * |
| Larson(1985) | ✓ | ? | * |
| Schwarz(1999) | ✓ | * | * |
| Han & Romero(2004) | * | * | ✓ |
| Hendriks(2001) | * | ? | ✓ |
| den Dikken(2004) | ✓ | * | ✓ |

(✓=説明可能 * =説明不可能 ?=曖昧)

(27)で挙げられた項目を全て網羅するにはeitherに関しては焦点不変化詞ではなくLarson(1985)の主張するように移動する数量副詞だと考えるほうが間接束縛の事実を説明することができ、さらに基本構造に関してはden Dikken(2004)の主張するように接続詞(or)移動による構造を仮定した方が等位構造の範囲と焦点化の作用域を説明できるように思える。だがここで注意すべき点は、Larsonとden Dikkenの分析を合成しただけの代案を提示したとしても等位構造と焦点化の事実だけは説明できるかもしれないが、非選択的な直接束縛とは異なるロバ文の間接束縛がどのような過程を経て成立するのかを充分には説明できないということである。

次節では、解決案としてif節のロバ文に再投射(re-projection)を導入し束縛の事実を説明したBoeckx(2003)をさらに修正した上で修正案を提示することでeither-or構文のロバ文を派生したい。

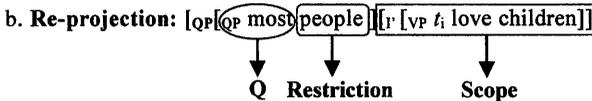
2. 顕在的再投射分析

2.1 再投射分析に関して

本節では Hornstein & Uriagereka (2002) によって提案された再投射(re-projection)を if 節ロバ文に適用した Boeckx (2003) には余剰な非顕在的操作が仮定されていることを指摘し、より単純化した顕在的派生がなされるべきであると主張したい。まず Hornstein & Uriagereka の (28) と (29) を見よう。

(28) Most people love children. (Hornstein & Uriagereka 2002:109)

(29) a. $[_{IP}[_{DP} \text{ most people}] [_{I'}[_{VP} t_i \text{ love children}]]]$



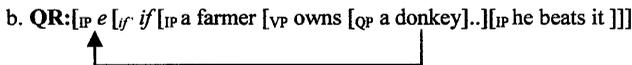
(Hornstein & Uriagereka 2002:109)

(28)の構造は(29a)であるが、解釈依存の構造は(29b)である。(29b)では数量詞(most)は名詞(people)の集合領域から選ばれその領域を制約(Restriction)し、さらに数量詞(most)が広い作用域をとると IP が数量詞句に依存することで QP が IP の作用域(Scope)を超える構造へと変化している。このように本来の構造から解釈依存の構造へと再び投射ラベルが変化することを再投射という。

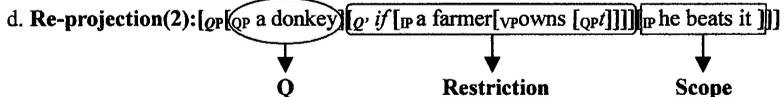
次にこの再投射という概念をロバ文に適用した Boeckx (2003) を概観する。Boeckx は(30)に対して(31a-d)における QR と再投射の過程を提案し、if 節型ロバ文の束縛の事実を説明している。

(30) If a farmer owns a donkey, he beats it. (Boeckx 2003:214)

(31) a. $[_{IP} [_{ifP} \text{ If a farmer owns a donkey}] [_{IP} \text{ he beats it}]]]$



c. **Re-projection(1):** $[_{ifP} [_{QP} \text{ a donkey}] [_{if'} \text{ if } [_{IP} \text{ a farmer } [_{VP} \text{ owns } [_{QP} t]]] [_{IP} \text{ he beats it}]]]]]$



(30)には(31a)から(31b)への QR に加え、次に(31c)の QP(a donkey)の if 節指定部への移動による if 節が主節に変化する再投射、最後に(31d)の QP 解釈の再投射により、数量詞(=a donkey)が広い作用域をとり、if 節以下を制約した形で a donkey は作用域(IP)内の代名詞(it)を束縛する。だがこの分析の問題としてなぜ(31c)、(31d)と二度もの再投射が必要なのだろうかという問題が残る。

次節では(31c)の再投射操作の余剰性を指摘し、単純化した顕在的な再投射分析

を提案したい。

2.2 Boeckx(2003)分析の修正案

これまで一般に if 節タイプのロバ文に再投射という概念を導入した Boeckx(2003)を概観してきたが特に本節では if 節が付加詞ではなく主節として解釈されるための(31c)の再投射が余剰であることを指摘したい。⁵そこで、if 節が付加詞としての地位を損なわず再投射が可能なのか検証する。

(32) a. Cellists *seldom* play out of tune.

b. seldom_x x is a cellists x play out of tune.

Q Nuclear Scope Restriction clause (Diesing 1992:10-11)

Diesing(1992)は(32a)の LF 構造として(32b)を提示し、副詞(*seldom*)は IP を節として制約し、さらに動詞句の作用域をとる写像仮説(Mapping Hypothesis)を提案している。⁶この分析は副詞(*seldom*)などの付加詞が QR により(29b)と(31d)の再投射構造に類似した構造を形成することから、統語上付加詞として機能する if 節も、主節として解釈されるために、わざわざ(31c)の再投射操作を適用せずとも、付加詞としての地位を保持した上で再投射構造が構築される可能性を示唆している。⁷

さらに、Boeckx の再投射は非顕在的に LF 部門で適用される点を言語の計算体系に関する Chomsky(2005b)の主張である(33)を考慮に入れ、その基本的考えを採用することで修正を図る。⁸

(33) S-structure and LF are no longer formulable as levels, hence disappear along with D-structure, and computations are reduced to a single cycle. (Chomsky 2005b:18)

(33)は、派生には内的併合と外的併合(転移)からのみ成り立つという前提が背後にあるため、LF で構築される解釈構造も単一の循環内で形成されるため、再投射による解釈依存の構造も派生段階で得られることになる。⁹ゆえに if 節型のロバ文には(34a-b)の2通りの投射構造が仮定できる。¹⁰

(34) If John owns a donkey, he beats it.

a. [_{QP} Φ_{adv} -if [_{IP} John [_{VP} owns a donkey]]] [_{IP} he [_{VP} [_e]_{adv} beats it]]]]



b. [_{IPoIP} if [_{IP} John [_{VP} owns a donkey]]] [_{IP} he [_{VP} Φ_{adv} beats it]]]]

(34a)の if 節に関しては節内の量化副詞が投射する際には QP として間接束縛が可能であり、移動が生じない(34b)は if 節(*IPoIP*)として解釈される。¹¹次節では本稿独自の再投射分析を適用する。

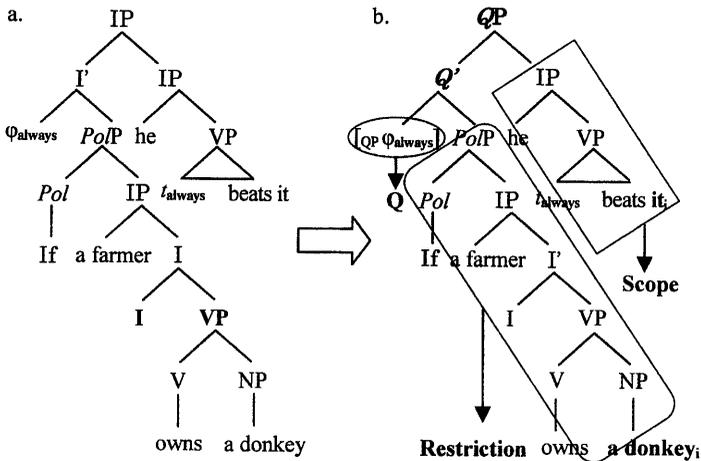
2.3 if 節ロバ文の再投射分析

まずは if 節型のロバ文に再投射分析を適用する。(30)の派生過程は(35a-d)に示す通りである。

- (35) a. **Merger of *if*-clause:** [_{IP} [_{PolP} *if*⁰ a farmer owns a donkey] [_{IP} he beats it]]
 b. **Merger of Φ_{always} :** [_{IP} [_{PolP} *if* a farmer owns a donkey] [_{IP} he [Φ_{always} beats it]]]
 c. **Quantifier Raising:** [_{QP} Φ_{always} [_{IP} [_{PolP} *if* a farmer owns a donkey] [_{IP} he [_t_{always} beats it]]] ...

(35a)では主節である IP に付加詞として機能する if 節が最初の後発付加という形で併合する。次に量化副詞が(35b)で後発付加した後に、(35c)では Soprtiche(1988)の主張するような付加詞投射の原理に類した形での移動が生じる。¹² 次に(35d)の数量詞繰り上げ(QR)は文全体が QP として解釈されるうえで必要なものである。次に再投射構造を得る過程として(36a-b)を提示する。

(36) Re-projection



(36a)は再投射が適用されると、全体がQPとして解釈される構造(36b)が得られる。(36b)では移動した空の量化副詞(Φ_{always})は数量詞句として機能するためそのQR適用により極性節(PolP)であるif節の領域を制約する形になる。¹³ また、IP(=he beats it)全体を作用域にとるため名詞(a donkey)が間接的に代名詞(it)束縛子となるため両者が同一指標付けされる間接束縛の関係が成立する。このように、(31c)の操作を適用せずに単純かつ顕在的な再投射適用が可能だと結論づけられよう。

3. Either-or 構文型ロバ文の再投射分析

3.1. 提案

本節では Larson(1985)、Shwarz(1999)らの基盤となる either-or 構文における等位構造構築の過程、Hendriks(2001)、den Dikken(2004)が主張する Either の焦点化範囲の指定、さらに通常のロバ文に間接束縛における再投射分析が適用されることを念頭に置いて、(37a-c)を提案したい。

- (37) a. 接続詞や移動により対句法形成要求(Parallelism Requirement)が満たされる。
 b. 付加詞 either の後発付加(Late Adjunction)により焦点化解釈の範囲が決定される。
 c. 数量詞句 either の顕在的再投射(Overt re-projection)適用により間接束縛が成立する。

3.1.1 対句形成要求、後発付加、再投射分析

まず(37a)を検証する。Larson(1985)、Shwarz(1999)らの核にある either-or 構文の等位構造形成と Hornstein & Nunes(2002)が提案する対句形成要求(Parallelism Requirement)を説明した(38)とを関連付け、定義付けを図りたい。

(38) I talked with the João and with the Maria.

- a. [_{TP} I talked^t+v [_{VP} talked [_{andP} [_{PP} with the João]] [_{and'} and [_{PP} with the Maria]]]]]
 b. [_{TP} I talked^t+v [_{andP} [_{VP} talked [_{PP} with the João]]

[_{and'} and [_{VP} talked [_{PP} with the Maria]]]]] (Hornstein & Nunes 2002:42-43)

Hornstein & Nunes は、ある句構造が形成された段階で and が語彙項目から選択されると(38a)では前置詞句、(38b)で動詞句形成が要請される並行性の要求を提案している。¹⁴ ゆえに either-or 構文においても派生の段階でどの範疇が連結されるかという対句形成要求が満たされるものとする。次に(37b)の either の焦点化と解釈の範囲を検証するべく den Dikken(2004)の(39)を提示する。

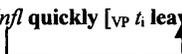
- (39) a. <Either> he <either> read <either> CHAPTER3 or ((he) read) CHAPTER4. [OB-focus]
 b. <Either> he <either> read <either> CHAPTER3 or ((he) read) CHAPTER4. [VP-focus]
 c. <Either> he <either> read <either> CHAPTER3 or ((he) read) CHAPTER4. [IP-focus]

(den Dikken 2004:12)

den Dikken によると(39a)の目的語の名詞句、(39b)の動詞句、(39c)の IP 節など either の焦点化する範疇に制限は見られないという。すると either-or 構文の or の形成する等位構造と either 解釈の範囲とは異なり、対句形成という見方からは矛盾が生じる。だがこのような矛盾は either を副詞と捉え、付加詞は主節形成後に後発付加されるという Stepanov(2001)の(40)に従えば(41)も自然と導かれよう。¹⁵

(40) a. *They did quickly leave. (cf. John quickly left.)

- b. *_{TP} John_i _{Infl} [_{VP} _t leave]] ⇒ [_{TP} John_i _{Infl} quickly [_{VP} _t leave]] (Stepanov 2001:98)



(41) a. *he did either read Chapter 3 or Chapter 4.

b. *_{[TP he_i Infl either [_{VP t_i read Chapter3]] or Chapter4.}}



Stepanov(2001)は(40a)の非文法性は(40b)で示すように副詞(quickly)が動詞の屈折要素決定後に後発付加されるからだと主張する。この考えに従うと(41a)の非文法性も(41b)の後発付加によるものと予測できる。次に *either* は文副詞であることを Culicover(1999)の(42)を証拠として提示したい。

(42) a. Mary <probably> would <probably> have <probably> been <?probably> spending her vacation at the seashore.

b. Mary <either> would <either>have <either>been <?either> spending her vacation at the seashore or she would have gone to the mountain. (Culicover 1999:52-53)

Culicover の(42)によると *either* は文副詞である *probably* とでは生起位置が共通しているため文副詞として機能することを示唆している。また *probably* は Sportiche (1988)が主張するよう文副詞として主節の作用域を超えて付加詞としての投射が可能であることから *either-or* 構文の *either* も屈折要素決定後に後発付加と 2.2 と 2.3 で概観した *if* 節型のロバ文に類した再投射適用も可能になる。

最後に(37c)を検証する。

(43) a. Urzik Ogia jaten du. 'Urtzi eat bread.'

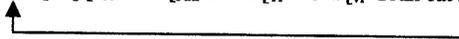
Bread AUX Urtzik eat

b. Ogia du Urtzik jan. 'Urtzi eat [bread]

Urtzik bread eat AUX

(Irutzun 2005:21)

(44) a. **Focusing:** [_{FocP} bread_i [_F+] [_{Foc} *Foc*⁰ [_{FinP} Fin ∅ [_{TP} AUX [_{VP} Urtzi eat t_i]]]]]]



b. **Topicalization(=QR)**

[_{TopP} [_{FinP} Fin-TP] [_{Top'} *Top*⁰ [_{FocP} bread_i [_F+] [_{Foc} *Foc*⁰ [_{FinP} Fin ∅ [_{TP} AUX [_{VP} Urtzi eat t_i]]]]]]]]



c. **Re-projection**

[_{FinP} [_{Fin'} *Fin*⁰ [_{TP} [_{Top'} *Top*⁰ [_{FocP} bread_i [_F+] [_{Foc} *Foc*⁰ [_{FinP} Fin ∅ [_{TP} AUX [_{VP} Urtzi eat t_i]]]]]]]]]]

Q Restriction

Scope

(Irutzun 2005:22)

Irutzun(2005)は西バスク語(43a)の目的語が限定的に焦点化される(43b)に定性(finiteness)数量詞を仮定し、(44a)の顕在的な名詞を焦点化するための移動と(44b)の定性、時制句の非顕在的な話題化移動(=数量詞繰上げ)を適用している。最後に(44c)の再投射(re-projection)構造上、結果的に時制句の集合領域から選ば

れた定性句数量詞(Fin)は時制句を制約し話題化句を作用域に取る。本稿でも(44b)に類する定性句数量詞を採用し、さらに either の QR は顕在的に解釈制約の範囲を指定することができ、同時に派生過程において再投射構造の作用域を定めることになる。

さらにロバ文の間接束縛を説明するべく Bianch(2000)の(45)の提案を概観する。

(45) a. the picture that Bill liked and that Mary hated

b. $[_{DP} \text{the } [_{\&P} [_{CP1} [_{DP} \text{picture}]_i \text{ [that Bill liked } t_i]]]_{\&P} \text{ and } [_{CP2} \text{op}_j \text{ [that Mary hated } t_j]]]$

 (Bianch 2000:133)

Bianch は等位接続された(45a)の第 2 節の先行詞の存在を説明するために Kayne(1994)の主張を採用し、先行詞の空演算子(op)を仮定することで第 1 節先行詞(picture)同様の移動操作を適用している。本稿でも 1.1 の(9b)で概観したように it を実在物(entity)とし間接束縛を説明するためにもこの空演算子が必要とされ、定性句数量詞が空演算子を先行詞として認可することが必要である。

3.2 either-or 型ロバ文の再投射分析

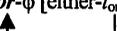
(37)の提案を基に either-or 構文のロバ文を派生する。(46)には(47a-c)の派生過程が考えられる。

(46) *Either John doesn't own a donkey or he keeps it quite.* (Heim 1990:173)

(47) a. **Parallelism Requirement:**

$[_{IP} \text{John doesn't own a donkey}]_{\text{Conj}} \text{either-or} [_{IP} \text{he keeps } [_{SC}[_{RelIP} \text{pro}[_{Rel'} \phi \text{ it}]] \text{quite}]]]$

b. **JP formation:**

$[_{JP} [_{IP} \text{John doesn't own a donkey}]]_{\text{JP-or-}\phi} \text{ [either-}t_{or}\text{]} [_{IP} \text{he keeps } [_{SC}[_{RelIP} \text{op}[_{Rel'} \phi \text{ it}]] \text{quite}]]]$


c. **Focusing of openness:** $[_{FocP} \text{op}_i [+F]]_{\text{Foc}} \text{Foc}^0 [_{JP} [_{IP} \text{John doesn't own a donkey}]]]$

$[_{JP-or-\phi} \text{ [either-}t_{or}\text{]}] [_{IP} \text{he keeps } [_{RelIP} t_{op} [_{Rel'} t_{\phi} \text{ it quite}]]]$


d. **merger of Fin** $\exists : [_{Top'} \text{Fin } \exists]_{\text{FocP}} \text{op}_i [+F]_{\text{Foc}} \text{Foc}^0$

$[_{IP} \text{John doesn't own a donkey}]]]_{\text{JP-or-}\phi} \text{ [either-}t_{or}\text{]} [_{IP} \text{he keeps } [_{RelIP} t_{op} [_{Rel'} t_{\phi} \text{ it quite}]]] \dots$

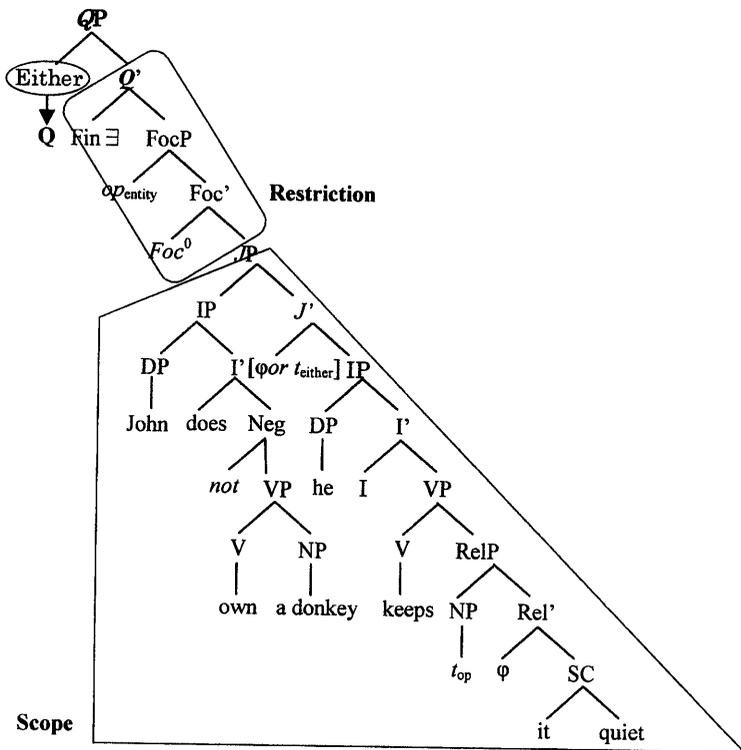
e. **Topicalization(QR)** $:_{TopP} \text{ [either-}t_{or}\text{]}_{\text{Top'}} \text{Fin } \exists]_{\text{FocP}} \text{op}_i [+F]_{\text{Foc}} \text{Foc}^0$

$[_{IP} \text{John doesn't own a donkey}]]]_{\text{JP-or-}\phi} \text{ [either-}t_{or}\text{]} [_{IP} \text{he keeps } [_{RelIP} t_{op} [_{Rel'} t_{\phi} \text{ it quite}]]] \dots$

(47a)で対句形成要求により同範疇である IP を形成された後に連結するべく either-or が付加される。次に(47b)ではこの対句形成要求は JP が形成のため or による JP 主要部への移動により満たされる。次に(44a)と同じ過程で(47c)では空演算子(op)に焦点化移動が適用され、E 型代名詞の解釈成立の可能性を得る。¹⁶ 次

に(47d)では存在を表す定性句数量詞(Fin \exists)が併合しE型代名詞となる解釈されるべく空演算子が認可される。次に(47e)において either の数量詞移動が生じることで either の解釈の範囲が IP 及ぶことが決定される。最終的な再投射構造として(48)を提示する。

(48) Re-projection



(48)では2.3で概観したif節の量化副詞(ϕ_{always})同様 either の QR が適用され頭在的に解釈制約の範囲を指定し、同時に派生過程で再投射構造の JP 節全体を作用域が定められる。また定性句数量詞が焦点化を受けた空演算子(Op)を認可することにより制約領域全体が E 型代名詞として解釈される可能性を得る。また数量詞 (either)が JP 節全体の作用域を制約することでことにより制約領域と作用域との間で c 統御関係が成立し、間接束縛という形で同一指標付与が可能になる。

3.3. 分析の整合性

本節では 1.3 で掲げられた(27)に関し(1)動詞句束縛、(2)V2 言語における語順に比重を置き、本分析を整合化する。(焦点化に関しては both...and...構文に関連付け、次節 4.2 で後述する。)

まず、1.2.2 と 1.3 の(27)からも明らかなように Larson(1985)と Hendriks(2001)以外の多くの先行研究が説明できない(49)の動詞句束縛に関して、本分析では(50a-e)の派生過程を提示する。

(49) Mary either stole or dropped the apples that Sue did. (Larson 1985:257)

(50) a. [V stole [NP the apples that Sue did]][either or][V dropped[NP the apples that Sue did]]...

b. [P [V stole [VP the apples [CP that Sue did]]] [J Φ-or [either t_{or}]] [V dropped [NP the apples that Sue did]] [VP op]...

c. **Focusing:** [IP Mary_I [Γ_{FocP} op [Foc⁰ Foc⁰]]_P [V stole [NP the apples [CP that Sue did]]] [J Φ-or [either t_{or}]]] dropped

d. **QR:** [IP Mary_I [Γ_{QP} either [FocP op [Foc⁰ Foc⁰]]_P [V stole [NP the apples [CP that Sue did]]] [J Φ-or [t_i t_{or}]]]] dropped [NP the apples [CP that Sue did]] [VP t_{op}]]]

e. [IP Mary_I [Γ_{QP} either [FocP op [Foc⁰ Foc⁰]]_P [V stole [NP the apples [CP that Sue did]]] [J Φ-or [t_i t_{or}]]]] dropped [NP the apples [CP that Sue did]] [VP t_{op}]]]

Q
Restriction
Scope
[NP the apples [CP that Sue did] ...

(50a)で either-or が併合する。次に(50b)で or が移動することで JP が形成され並行性の要求が満たされる。(50c)では動詞 did の先行詞演算子(op)が焦点化素性併合後に焦点化移動が生じ、動詞句と同一指標付与される可能性を得る。次に(50d)で either の数量詞繰上げが適用され、最後に(50e)の再投射構造上ロバ文同様に間接束縛の関係が成立する場合は数量詞句(either)が、焦点化された動詞の先行詞演算子の集合領域を制約し動詞句を作用域に取り束縛することができる。

次に 1.2.1 と 1.3 の(27)からも明らかなように Larson(1985)と Schwarz(1999)では説明できない外見上対句形成の要求を満たさないノルウェー語 either-or 構文(51)には(52a-e)の派生が後続する。

(51) [Enten bærer den mat til fuglene], eller [den bærer snø]

either carries it food to the-birds or it carries snow.'

Either it carries food to the birds or it carries snow.' (Johannessen 2005:439)

(52) a. [CP den bærer mat til fuglene] [enten eller] [CP den bærer snø]

b. **JP formation:** [JP [CP den bærer mat til fuglene] [J eller [enten t_{aller}]] [CP den bærer snø]]]

c. QR: [QP *enten* [JP[CPden bærer mat til fuglene]] [J *eller* [t_{entent} t_{aller}]] [CP den bærer snø]]]

d. merger of Foc^0 : [$FocP$ Foc^0 [QP *enten* [JP[CPden bærer mat ...]] [J *eller* [t_{entent} t_{aller}]] [CP den...]]]]

e. [$FocP$ *Enten_i* [Foc bærer_i - Foc^0 [QP *enten* [JP[CPden t_i mat ...]] [J *eller* [t_{entent} t_{aller}]] [CP den...]]]]]

(52a)で *enten eller* (=either-or) が併合されると、(52b)で並行性の要求により CP の等位構造が形成され、さらに(52c)では焦点化される解釈の範囲が *enten* (=either) 繰り上げにより決定される。¹⁷ 次に(52d)でノルウェー語は文頭に位置する *enten* (=either) は焦点化不変化詞である *both* と同様の焦点化が導かれるため焦点化素性 (Foc^0) 併合後 *enten* は $FocP$ 指定部へ移動し、さらにそれに伴い(52e)にみられるよう英語の否定倒置移動にも似た動詞句 (*bærer*) の移動が随伴される。

次に本分析と否定倒置移動との関連性については次節において適切な派生過程を提案する。

4. 再投射分析の一般化

4.1 neither-nor 構文と否定基準

本節では *either-or* 構文と比較の対象になる構文 *neither...nor...* 構文 (以下 *neither-nor* 構文) と *both..and..* 構文の派生過程と本分析の主張とを照合するという形でさらなる一般化を図りたい。

まずは *either-or* 構文の否定形に対応する(53)の *neither-nor* 構文について、これまで本稿において適用した *either-or* 構文の分析を踏まえた形で、適切な派生機構を提案する。

(53) a. *Mary neither spends her vacation at the seashore nor does she go to the mountain.*

b. *Neither does Mary spends her vacation at the seashore nor does she go to the mountain.*

c. **Neither Mary spends her vacation at the seashore nor she goes to the mountain.*

(den Dikken 2004:23)

(53a)と(53b)で *neither-nor* 構文が成立するには下線部が示すように否定倒置 (Negative Inversion) が義務的であるのは否定倒置が駆動していない(53c)の非文法性からも明らかである。この否定倒置が義務的な理由を Hegeman & Zanuttini (1991)の(54)の基準に従い検証する。¹⁸

(54) The Negative Criterion

A negative operator (φ_{Neg}) must be in Spec-Head agreement configuration with $a[+Neg]$ head.

(Haegeman & Zanuttini 1991:244)

(55) a. [$_{\text{NegP}}$ Only last year [$_{\text{Neg}} \varphi_{\text{Neg}}$ did John get any grey hairs]]. (Progovac 1992:342)

b. [$_{\text{CP}}$ neither ... [$_{\text{NegP/CP}} \text{ nor } [_{\text{Neg}} \varphi_{\text{Neg}} [IP [I...]]]]]$ (Culicover 1999:163)

(54)の否定基準 (Negative Criterion) は、否定素性 (+NegP) は主要部の演算子 (φ_{Neg}) と

指定部-主要部位置で認可関係にあることを意味する。よって(55a)で否定倒置を駆動されるのは否定的意味を有する前置詞(only)と主要部の演算子(ϕ_{Neg})とは指定部-主要部位置で認可関係にあるからである。さらに Culicover(1999)の提示する neither-nor 構文の基本構造(55b)も(54)に従っており、否定演算子移動は否定倒置を引き金すると結論づけられ(53b)には(56a-d)の派生過程が考えられる。

- (56) a. **merger of ϕ_{Neg}** : [_{IP} Mary spends her...][_{J'} ϕ_{Neg} [neither-nor][_{IP} she goes to the...]]
 b. **nor-raising**: [_{J'} [_{IP} Mary spends her...]] [_{J'} nor_i [_{NegP} does- ϕ_{Neg} [neither- t_i][_{I'} she go to the ...]]]
 c. [ϕ_{Neg} [_{J'} [_{IP} Mary spends her...]] [_{J'} nor_i [_{CP} does- t_i ϕ_{Neg} [neither- t_i][_{I'} she go to the ...]]]]
 d. **QR**: [_{NegP} e [ϕ_{Neg} [_{J'} [_{IP} Mary spends her...]] [_{J'} nor_i does- t_i ϕ_{Neg} [neither- t_i][_{I'} she go to ...]]]]]
 e. **NegP formation**: [_{NegP} neither [_{Neg} does- ϕ_{Neg} [_{IP} Mary spends...]] [_{J'} nor_i does- t_i ϕ_{Neg} [_{I'} - t_i][_{IP}...]]]]

まず、(56a)で対句形成要求により等位接続詞(neither-or)が主節 IP を連結する過程は either-or 構文の派生と類似するが否定演算子(ϕ_{Neg})が併合する点はこれまでの派生と異なる。次に(56b)での nor が繰り上がることで否定倒置駆動により否定節が形成されるがこの時に否定節形成という解釈構造の並行性が要求される。次に(56d)で neither が移動した後に(56e)で否定演算子(ϕ_{Neg})と指定部-主要部関係上(54)に従い否定節が形成される。また、(53a)と異なり(53c)が排除されるのは第2節形成時における否定倒置駆動の欠如により、(54)に従った形で否定節が形成されないからである。

4.2 both...and...構文と焦点化

次に both...and...構文と either-or 構文と比較し、区別化したい。both は構造上動詞句に付加し IP 位置までは繰り上がれない only, even に類する焦点化不変化詞であることを主張したい。

(57) <*Both> John <both> ate <both> rice and beans.

(58) John(*both/either)seem[_{IP} all t to have gone out]and[_{IP} t to have gone out].(den Dikken 2004:30)
 これまで考察してきた either-or 構文と異なり、both 構文は(57)が示すように名詞、動詞とは異なり IP に付加することが不可能である。また(58)が示すように2つの IP を超えた移動ができず either(あるいは文副詞のように)IP 全体を修飾する機能がないと結論づけられよう。だが Zamparelli(2000)の提示するイタリア語の(59)と照らし合わせるとこの主張には誤りが見られるのではないかと思わせる。

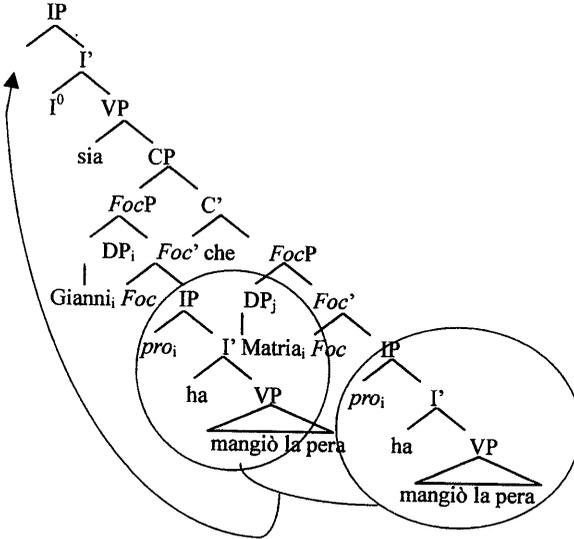
(59) Sia [Gianni]che [Maria] hanno mangiato la pera.

Both Gianni and Maria have eaten pear

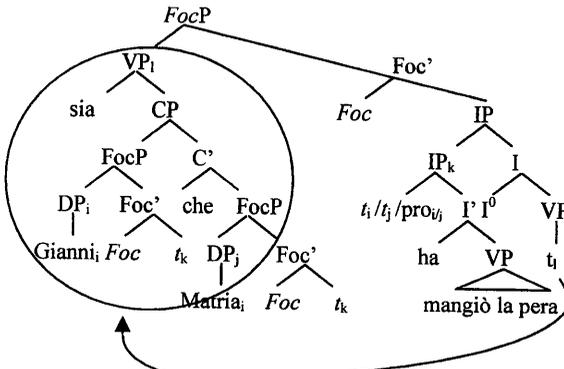
(Zamparelli 2000:14)

(59)の both は文頭に位置しており、名詞を結合している解釈と、IP を結合する場合の解釈も存在することが予測され、実は both は IP より高い位置に付加できるため(57)、(58)とは矛盾するように思える。だが Zamparelli は後者の派生に関しては否定しており(59)の both は純粋な焦点化不変化詞であり動詞句に修飾することと密接に関連するものとし、(60a-b)の派生過程を提示している。¹⁹

(60) a.



b.



(Zamparelli 2000:15)

(60a)においてそれぞれ低いIPに pro が生起し、さらに顕在的な主語(Gianni, Maria)

は Foc 素性併合後焦点化を受けていることに注意したい。このような焦点化が生じるのは 2 つの FocP は接続詞(che)により等位接続され、さらに英語 both に値する sia は動詞句に付加した焦点化不変化詞による。さらに 2 つの IP において共通する右端の部分を Across The Board (ATB)の抜き出しが適用されることが分かる。(60a)に Foc 素性が併合し、焦点化移動をした(60b)では、VP 移動(remnant movement)による焦点化移動が駆動されたものである。その結果、焦点化不変化詞(sia=both)は IP 全体を解釈し、*pro* が両名詞と解釈される場合と恣意的に解釈される場合とを説明できる。²⁰ この派生が英語で不可能なのは一般に恣意的に解釈される *pro* のような空の代名詞的要素が欠如しているために最初の焦点化すら許されないことは容易に想像可能である。とはいえ(60b)も sia 自体が移動して IP に付加するのではなく、あくまで動詞を付加する位置に生起し、焦点化不変化詞の地位を保持する点では英語もイタリア語も共通している。ゆえに both は only, even などの動詞に修飾する純粋な焦点化不変化詞に属し本稿での数量詞副詞として機能する either とは区分される。²¹

5. 結語

本稿では either-or 構文のロバ文においてなぜ同じような束縛関係が成立するのか考察し適切な派生過程を展開してきたがこれまでの分析は(61)に要約される。

- (61) a. 関係詞型、if 節型のみならず either-or 構文のロバ文では if 節型、関係節型のロバ文同様に先行詞と代名詞(it)との間には Häik (1984)の提案する間接束縛の関係が成立するため、Leu(2005)が主張するように代名詞は存在物(entity)として解釈される。
- b. either-or 構文をめぐる先行研究には移動分析(Larson(1985))、削除分析(Schwarz(1999))、右方接点線上げ分析(Han & Romero(2004))、焦点不変化詞分析(Johannessen(2005))と 3 種類に分類されるがそのどれもがロバ文に見られる間接束縛を説明することができない。
- c. Hornstein & Uriagereka(2002)の再投射(re-projection)分析を if 節のロバ文に導入した Boeckx(2003)の主張が有効であるが Diesing(1992)の写像仮説と LF で構築される解釈構造も単一の循環内で形成されるため、LF 部門を排除する Chomsky(2005a,b)の主張に照らし合わせると再投射による解釈依存の構造も派生段階で得られることになる。
- d. either-or 構文のロバ文の構造に関しては(1)接続詞 or 移動による対句形成要求(Parallelism Requirement)、(2)付加詞 either の後発付加(Late Adjunction)による焦点化解釈範囲の決定、さらに(3)数量詞句 either の顕在的再投射(Overt

re-projection)適用という3つの操作により一般的な関係詞節、if節のロバ文に見られる間接束縛が成立する。

- e. *neither-nor* 構文では否定倒置形成の移動、ノルウェー語などの V-2 倒置は義務的な焦点化移動が適用されることを概観した。また *both-and* 構文における *both* は焦点化不変化詞であることを見受けられ、*either-or* 構文とのさらなる区分化が示唆された。

註

- 1 Heim(1990)はこの間接束縛の考えを取り入れ(i)の変形規則を提示している。

(i) a. [every_{x1} man(x₁) that [[a donkey(x₂)₂ [x₁owns x₂]]]]₁[x₁ beats it₂]

b. [every_{x1} man(x₁) that [[a donkey(x₂)₂ [x₁owns x₂]]]]₁[x₁ beats it₂][[a donkey(x₂)₂ [x₁owns x₂]]]]

(Heim 1990:170)

Heim は代名詞が定性ではなく、さらに先行詞が代名詞の作用域を越えない持たない場合(言い換えると間接束縛の関係が成立する場合)、その代名詞は(i a)から(i b)への変形規則により it は E 型代名詞の解釈が可能になる。

- 2 なぜ(16a)は文法的に問題があるのに対して、(i a)は文法的かを検証する。

(i) a. This either pissed Bill or Sue off.

b. This either [_{VP} pissed Bill e_i] or [_{VP} pissed Sue e_i] off_i (Han&Romero 2004:561)

Han&Romero(2004)によると(i)の不変化詞は一般にVPを超えたRNRは可能であり、IPを超えた(29)は問題になるからだと述べている。また彼らはKayne(2000)に基づいた不変化詞移動に伴う代案も提示しているが本稿の分析を(i a)に適用する際は(ii a-d)の派生が考えられる。

(ii) a. particle preposing: This off_i [_{VP} pissed Bill Sue t_i] (cf.*off_i [_{IP} This [_{VP} pissed Bill Sue t_i]])

b. VP preposing: This [_{VP} pissed Bill Sue t_i]off_i t_{VP}]

c. Late adjunction of *either-or*: This [_{VP} pissed Bill [either-or]Sue t_i] off_i t_{VP}]

d. *either-raising*: This *either* [_{VP} pissed Bill [_teither-or] Sue t_i] off_i t_{VP}]

- 3 Han&Romero(2004)は *either-or* 構文の *either* が移動しない根拠として疑問文 Q とは関係づけられることが無いからであると主張している。(i)を提示し検証する。

(i) a. Did this piss Bill or Sue off?

b. Q [c Did t_Q this piss Bill e_i] or [c Did this Sue e_i] off_i? (Han&Romero 2004:532)

(i a)が文法的な理由はRNRが適用後演算子として機能するQ素性が移動するからである。さらに彼らは移動する *either* に対応する表現として *whether-or not* 構文における *whether* をあげている。なお if 節との比較の上で *whether* 節の構造上の生起位置に関しては註 11 を参照。

- 4 Heim(1982)の意味における非選択的束縛とは(i)に示すものである。

(i) [_{IP} Φ_{always} [_{IP} [_{CP} If a man owns a donkey] [_{IP} he t_{always} beats it_i]]]. (奥野・小川 2003:215)

(ii) a. *A man who owns every donkey_i beats it_i.

b. * [_{IP} Φ_{always} [_{IP} A man [_{CP} who owns every donkey_i] beats it_i]]]

(i)では必ず束縛が義務的に適用されるため間接束縛とは異なる。なおこの分析の問題点は(ii a)

主張している。基本的に(i a)は動詞(read)に選択されるため what の投射により自由関係節の DP に、また(i b)は動詞(wonder)に選択されるため主要部として C が投射する CP が形成されるがこのような考えが本稿での再投射分析へ完全に拡張できるかに関しては検討の余地がある。

9 Citcko(2005)は外的併合と内的併合に加え、並行的併合(parallel merge)を展開している。

(i) I wonder what Gretel recommended and Hansel read. (Citcko 2005:482)

(ii) a. [_& & [_T Gretel [_V recommended [_{NP} what]] [_T Hansel [_V read [_{NP} what]]]]...

b. [_C C [_& & [_T Gretel [_V recommended [_{NP} what]] [_T Hansel [_V read [_{NP} what]]]]...

c. [_{CP} what [_C C [_& & [_T Gretel [_V recommended [_{NP} what]] [_T Hansel [_V read [_{NP} what]]]]]...

d. I wonder [_{CP} what [_C C [_& & [_T Gretel [_V recommended [_& & [_T Hansel [_V read [_{NP} what]]]]]]]...

(Citcko 2005:483-484)

並行的併合とは(i)の派生過程(ii a)で2つの動詞(recommended と read)の選択特性を満たすため同時に wh 句(what)を選択し併合することを意味する。さらに(ii b)で C 併合後、探査である C により wh 句が再併合(re-merge)したものが(ii c)である。最終的に(ii d)のように and の生起位置が変化し(i)の語順を得るが、この操作が本稿における再投射に類するものか否かに関してはさらなる探究を必要とするものであろう。

10 語彙レベルでの統語、解釈構造との相互関係を考察するために Pesetsky(1985)を概観する。

(i) a. ungrammaticality

b. [_N [_A un [_A grammatical]] ity]

c. [_N [_A un [_N grammaticality]]]

(Newell 2005:14)

(ii) a. [_N [_A un [_A grammatical]] ity]

b. QR: [_N [_A un [_A grammatical]] t_i] ity_i]

(Newell 2005:15)

否定を意味する接頭辞(un)は選択特性として形容詞(grammatical)に付加するが、意味の上では名詞句(grammaticality)に付加する。この矛盾を解決するため Pesetsky は(ii)を提示し、LF 部門での(ii a)から(ii b)への ity の QR を仮定しているが Newell(2005)が指摘しているようになぜ ity に数量詞の地位があるのか極めて曖昧である。またこの問題は、本稿では再投射分析を適用するため自然に統語構造(i b)から(i c)への解釈構造が派生過程で導かれることになる。

11 本稿においても whether と if の生起位置に関して Culicover(1999)に従い区別化する。

(i) a. *Lee wonders if at no time would Robin be volunteer.

b. ?Lee wonders whether no time would Robin be volunteer.

(乗原・松山 2001:54)

(ii) a. I wonder [_{CP} [_C whether] [_{IP} I should invite Bill]].

b. I wonder [_{PolP} [_{Pol} if] [_{IP} I should invite Bill]].

(乗原・松山 2001:55)

(i) で if と at no time が共起できないのは Culicover が主張するよういずれも極性句(PolP)指定部に位置するからである。また Larson(1985)、Han & Romero(2004)、den Dikken(2004)らの主張と同様に whether は[+WH]を有する either に対応するものと考えられるため CP 指定部に位置する。

12 本稿で量化副詞(always)を設定した理由として Boeckx(2003)の(31d)における donkey 自体の QR は非選択的な直接的束縛となり得る可能性があるからである。Heim(1982)の主張する非選択的な直接束縛に関しては註4を参照。

13 西垣内(1999)によると量化副詞(always)に対応する日本語ロバ文の量化副詞は「も」である。

(i) a この次に誰_iが入ってきても、その人_iにプレゼントをあげよう。

b. 何_iを買っても、彼は喜んでそれ_iを大切にした。

(西垣内 1999:72-73)

(i) いずれにおいても英語の量化副詞(always)同様 LF で QR を適用することにより非選択的束縛により「誰/何」が「それ」を束縛し同一指標を得る。

14 (38)はポルトガル語を英語に置き換えたものであることに注意したい。

15 Stepanov(2001)によると後発付加は(i a-b)の(非)文法性を説明可能である。

(i) a. *Which claim [that John_i was asleep] was he_i willing to discuss?

b. Which claim [that John_i made] was he_i willing to discuss? (Stepanov 2001:95)

(i a)と異なり(i b)で名詞(John)と代名詞(he)が同一指標付けられるが条件 C に抵触しないのは WH 句(which claim)移動後、関係節(付加詞)の後発併合が適用されるからである。

16 本稿における空演算子の焦点化移動は正当かを検証するために Kayne(2002)を概観する。

(i) a. thinks [John he] is smart.

b. John_i thinks [_i he] is smart. (Kayne 2002:135)

(ii) a. Watch out! He's got a knife.

b. Watch out! That man he's got a knife. (Kayne 2002:139)

Kayne(2002)は(i a)で示すよう先行詞(John)と代名詞(he)とが構成素を形成する段階で束縛関係が成立し、さらに(i b)で John の主節移動を仮定している。また Kayne はこの考えを(ii a)と話題化移動(ii b)を同一視することにまで拡張し、(ii a)にはドイツ語でみられるような空要素の話題化移動が適用されたと主張している。この主張は話題化移動と本稿の焦点化移動とで相違するものの空範疇設定により束縛関係を容易に説明する点では共通し、さらに本稿では(i)、(ii)の通常の束縛に関してほとんど触れておらずまた Kayne 自身ロバ文の間接束縛に関しては(i)の分析の適用可能性に関して問題視していることから両分析は相補分布的側面があることを示唆しているといえよう。

17 Johannessen(2005)は2番目の CP 節内部に either が埋め込まれて非顕在的な LF での QR を仮定しているが本稿では派生過程で either 解釈が決定されると考えるためそのような操作を仮定しない。

18 否定節形成に関して Haegeman & Zanuttini(1991)の提示する西フラマン語(i)を概観する。

(i) a. …da valere niemand nie kent

b. …da valere niemand nie kent

valere not know nobody "valere doesn't know nobody" (Haegeman & Zanuttini 1991:235)

(ii) da valere [_{NegP} niemand_i [_{Neg} nie [_{Neg φ_{Neg}} [_{VP2} kent _i]]]] (Haegeman & Zanuttini 1991:235)

Haegeman & Zanuttini は(i a-b)の解釈の相違は(i a)の構造(ii)から分かるように目的語(niemand)が否定節指定部へ移動する際否定節の EPP が満たされ否定的に解釈される。しかしながら、その移動がない場合には二重否定として解釈されるため否定の意味にはならない。

19 Johannessen(2005)のノルウェー語における both…and…構文の主張を概観する。

(i) a. Bade ris og bonner passer til denne fiskeretten

both rice and beans suite to this fishdish

b. [CP (QR-target)] CP [_{Comp}PDP] Både [_{Comp}PDP] ris og bønner]] [_{VP} passer til denne…]]

(Johannessen 2005:431)

(i)には2つの解釈(①米か豆の内いずれか一方②米と豆両方とも)が存在する。この相違の要因として Johannessen は(i b)の構造を仮定し CP 指定部へ both が非顕在的に移動すると either 解釈が生じ移動しないと英語同様の both 解釈が生じると述べている。この both 移動の可能性に関しては本稿では Zamparelli(2000)の立場をとり、あくまで焦点化不変化詞として動詞への付加位置に生起するものと考え再投射分析を適用する分析を採用する。

20 Zamparelli(2000)は焦点移動の操作適用の時期に関して不明瞭だと述べており、その詳細を明ら

かにしていない。だが Chomsky(2005a,b)に照らし合わせるとこの分析における焦点化は端素性(edge feature)を照合するための派生過程で適用される内的併合(internal merge)だと考えても問題は無い。

21 焦点化不変化詞(only)に関して、Büring&Hartmann(2001)の提示する(i)と(ii)を概観する。

(i) a. (weil) ich nur GERDAF gekusst zu haben bereue

(because) I only Gerda kissed to have regret

b. [VP₁ only [VP₂ CP [IP Gerda_F kissed to have]]][regret]

(Büring&Hartmann 2001:255)

(ii) a. (weil) ich es GERDAF gekusst zu haben bereue

(because) I it only Gerda kissed to have regret

b. [VP₁ [CP C [IP PRO_i I [VP₂ nur/only [VP₃ Gerda_F kissed to have] I]]][regret]

(Büring&Hartmann 2001:256)

Büring&Hartmann は焦点化不変化詞(only)による名詞(Gerda)を強調して発音する焦点化はどの階層に位置する VP を修飾するかにより決定されるため、非頸在的に適用されるのではないと主張している。この点においては本稿の both-and 構文の both も動詞句を修飾することができるため Zamparelli(2000)と符合するといえよう。

参考文献

- Bianchi, Valentina.2000. The raising analysis of relative clause: A reply to Borsley. *Linguistic Inquiry* 31:123-140.
- Bianchi, Valentina.2001. Antisymmetry and the leftness condition:leftness as anti-c-command. *Studia Linguistica* 55:1-38.
- Boeckx, Cedric.2003. (In)direct binding. *Syntax* 6:213-236.
- Büring & Hartmann. 2001.The syntax and semantics of focus-sensitive particles in German. *Natural Language and Linguistics Theory* 19: 229-81.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Ken Hale: A life in language, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2005a. On phases. Ms., MIT.
- Chomsky, Noam. 2005b. Three factors in the language design. *Linguistic Inquiry* 26:1-22.
- Citcko, Barbara. 2005. On the nature of merge: external merge, internal merge and parallel merge. *Linguistic Inquiry* 26:475-96.
- Culicover, Peter W. .1999.*Syntactic Nuts: Hard Cases, Syntactic Theory, and Language Acquisition*, New York: Oxford University Press.
- Danny Fox and Jon Nissenbaum. 1999. Extraposition and Scope:A Case for overt QR. *WCCFL* 18 1-21.
- Diesing, Molly. 1992. *Indefinites*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Dikken, Merical den. 2004. The syntax of either...or ...once more.
http://web.gc.cuny.edu/dept/lingu/dendikken/ either_or_nllt2.pdf
- Evans, Gareth.1980. Pronoun. *Linguistic Inquiry* 11:337-367.
- Häk, Isabella. 1984. Indirect binding. *Linguistic Inquiry* 15:185-239.

- Haegeman, Liliane and Raffaella Zanuttini. 1991. Negative head and the neg criterion. *The Linguistic Review* 8:233-251.
- Han, Chung-hye and Maribel Romero. 2004. The syntax of whether/Q...or question. *Natural Language and Linguistics Theory* 22: 527-64.
- Heim, Irene. 1982. The semantic of definite and indefinite noun phrases, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Heim, Irene. 1990. E-type pronoun and donkey anaphora. *Linguistic and philosophy* 13:137-177.
- Hendriks, Petra. 2001. "Either" as a Focus Particle.
<http://semanticsarchive.net/Archive/mIOM2VIZ/either01.pdf>.
- Hornstein, Norbert and Juan Uriagereka .2002. Reprojections. In *Derivation and explanation in the minimalist program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Sleely, Oxford: Blackwell.
- Hornstein, Norbert and Jairo Nunes. 2002. On asymmetries between parasitic gap and across-the-board construction. *Syntax* 5:26-54.
- Iruartzun, Atriz. 2005. (in press). Focus and clause structuration in the minimalist program., to appear in C. Boeckx (ed.), *Minimalist Theorizing*. Amsterdam, John Benjamins.
- Johannessen Janne Bondi. 2005 The syntax of correlative adverbs. *Lingua* 115:419-443.
- Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kayne, Richard S. 2000. *Parameters and universals*. New York: Oxford University Press.
- Kayne, Richard S. 2002. Pronoun and antecedents. In *Derivation and explanation in the minimalist program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Sleely, Oxford: Blackwell.
- Kayne, Richard S. 2005. *Movement and silence*. New York: Oxford University Press.
- 柴原和夫・松山哲也. 2001. 『補文構造』. 東京: 研究社.
- Larson, Richard K. 1985. On the syntax of disjunction scope. *Natural Language and Linguistics Theory* 3: 217-64.
- Leu, Thomas. 2005. Donkey pronouns: void descriptions?
<http://homepages.nyu.edu/~tl403/Leu-NELS-35-donkey-paper-final.pdf>
- 中島平三・池内正幸. 2005. 『明日に架ける生成文法』. 東京: 開拓社.
- Newell, Heather. 2005. Backtracking paradoxes and particle verbs: a late adjunction analysis. *Proceedings of ConSOLE VIII*: 1-25.
- 西垣内泰介. 1999. 『論理構造と文法理論 - 日英語の WH 現象』. 東京: くろしお出版.
- Nunes, Jairo. 2004. *Sideward movement and linearization of chains in the minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT press.
- Pesetsky, David. 1985. Morphology and logical form. *Linguistic Inquiry* 16:193-246.
- Progovac, Ljiljana. 1991. Polarity in Serbo-Croatian: anaphoric NPIs and pronominal PPIs. *Linguistic Inquiry* 22:567-572.
- Progovac, Ljiljana. 1992. Negative polarity licensing must involve comp. *Linguistic Inquiry* 23:341-347.
- Rackowski, Andrea and Norvin Richrds. 2005 Phase edge and extraction *Linguistic Inquiry* 36:565-599.
- Reis, Marga. 2005. On the syntax of so-called focus particles in German—a reply to Buring & Hartmann 2001. *Natural Language and Linguistics Theory* 23: 459-83.
- Schwarz, Bernhard. 1999. On the syntax of either...or. *Natural Language and Linguistics Theory* 17: 339-70.

- Sportiche Dominique. 1988. A theory of floating quantifiers and corollaries of constituent structure. *Linguistic Inquiry* 19:425-51.
- Stepanov, Arthur. 2001. Late adjunction and minimalist phrase structure. *Syntax* 4:94-125.
- 渡辺明. 2005. 『ミニマリストプログラム序説』.東京:大修館書店.
- Zamparelli, Robert. 2000. Distributive conjunction and sentence reduction.
<http://www.westerni.unibg.it/dsfc/pers/zamparelli/ling/sia-che.pdf>.

甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間5,000円、学生会員については2,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：ワードプロセッサ（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
 - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook, 6th ed.* (New York: MLA, 2003) 『*MLA 英語論文の手引き*』第 6 版、北星堂、2005 年)に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を A4 判 400 字詰め原稿用紙 3 枚（英文の場合は、A4 判タイプ用紙ダブルスペースで 2 枚）程度にまとめて、3 部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

甲 南 英 文 学

No. 21

平成 18 年 6 月 20 日 印刷

— 非 売 品 —

平成 18 年 7 月 1 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
